

## 辟邪の貝——しゃこがい考——

木下尚子<sup>※</sup>

---

目 次

---

- 一、はじめに
  - 二、考古資料にみるしゃこがい
    - 1. “しゃこがい”とは
    - 2. しゃこがいの利用
    - 3. 墓地のしゃこがい
    - 4. 貝集積遺構に伴うしゃこがい
    - 5. 住居跡のしゃこがい
    - 6. その他の遺構に伴うしゃこがい
    - 7. まとめ
  - 三、しゃこがいの呪力
    - 1. 考古資料にみるしゃこがいの呪力
      - (1) 選択の理由
      - (2) しゃこがいと異常な死
      - (3) しゃこがいは死霊の捕獲・封入の呪具
      - (4) しゃこがいは記号
      - (5) 貝集積遺構に伴うしゃこがい
      - (6) 境界の呪具になったしゃこがい
    - 2. 民俗資料にみるしゃこがいの呪具
      - (1) “阻止の呪力”としゃこがい
      - (2) “返しの呪力”としゃこがい
      - (3) 幼児の死としゃこがい
  - 四、結語
- 

### 一、はじめに

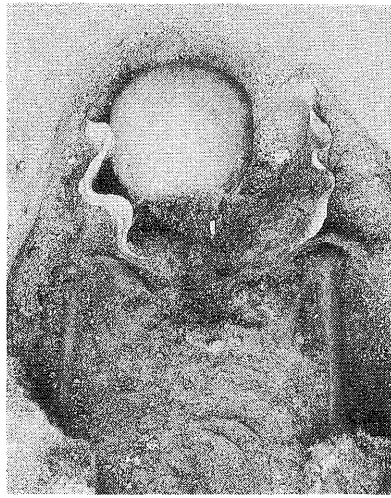
1987年秋、沖縄で墓地の発掘現場を見学する機会に恵まれた。密集する墓墳のひとつを覗き込

---

※梅光女学院大学文学部助教授



1



2

写真1 シャコがいに頭  
をつっこんだ遺体

1. 埋壙の全体
2. 東部の拡大

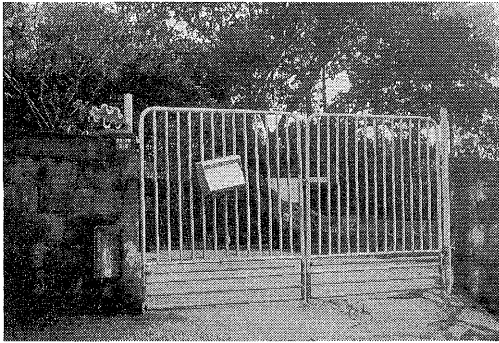
沖縄県安座間原第一遺跡  
41号人骨（呉屋義勝氏提  
供）

んだ時の驚をを、私は今でも忘れることができない。うつぶせになった遺体が一對の大きなしゃこがいに頭を突っ込んで、まるで地底にでも潜っていくかのように、斜めに葬られていたのである。私はしゃこがいに込められた貝と死との強烈な結びつきを感じずにはいられなかった。宜野湾市安座間原第一遺跡を初めて訪れた日のことである。墓の時期は縄文晩期に相当する。（写真1）

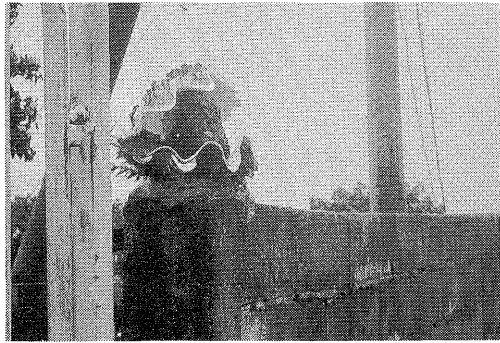
このことがあって、遺跡内のしゃこがいに関心をもつようになった。類例を調べてみると、しゃこがいには実用を離れた儀礼的用法が少なからずあり、しかも事例は極端に墓地に集中している。またその役割が他の貝で代用されることはほとんど無い。しゃこがいには古くから特別の意味が付せられていたらしい。

もとよりしゃこがいが特別な貝であることは、古い歌謡や近代以降の民俗事例等によって一般にも了解されている。地域によっては、現在でもムンヌキムン（魔除け）としてT字路の突き当たりや家の門柱の上に置かれ、使用され続けている。この貝の特別な意味は、魔除けの呪具として現在なお健在であるといえよう。（写真2）

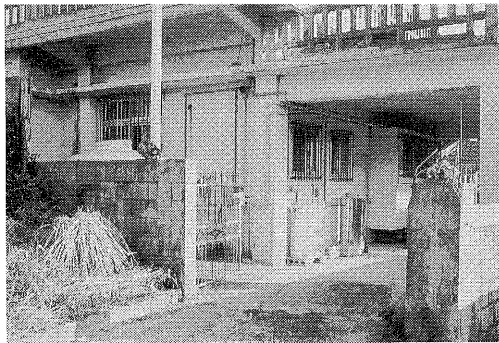
しゃこがいに限らず一般に貝や珊瑚に呪力のあることは、民俗事例でひろく知られるところであるし、先学によっても早く指摘されてきた<sup>2</sup>。沖縄本島木綿原遺跡の弥生時代並行期の墓では、遺体にたくさんの貝や珊瑚が伴っていた。これらが遺体の足部に集中していたことから、調査者の当真嗣一氏は「これらは死者の霊の浮遊を恐れて封じ込みをはかるためのマジカル的な意味が付された習俗として解することができる」とし、また「副葬品に海の自然物、たとえば珊瑚石、貝殻等が多く取り入れられていること等は、当時の人々が海から採れる物に呪力的な要素を認めていたことの証左としてみることができよう。」と述べておられる<sup>3</sup>。これは他の多くの事例にも示されているところであり、氏の指摘は正鵠を射たものと思う。しかし海で採れたものならば何



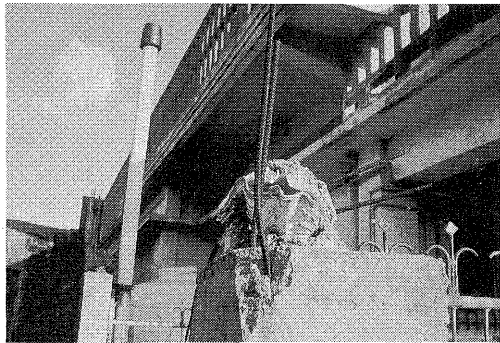
1



2



3



4

写真2. 民家の魔除けのしゃこがい

1. 両門柱上にのるヒレジャコ（外側に口を開いている）
2. 1の右側しゃこがいの拡大（中に柱状のサンゴがはいる）
3. 門の両側にのるヒレジャコ
4. 3の右側しゃこがいの拡大
  1. 2は宜野湾市在住の勝連町出身者宅（1992年撮影）
  3. 4は具市川氏川田の民家（1992年撮影）

でも呪力があるか、というそうではない。遺跡において儀礼的な性格を付される貝は、幾種類かに限られているからである。その中でも、墓におけるしゃこがいの使用は際立っている。

では何故それが他の貝ではなくしゃこがいなのだろうか。しゃこがいの持つ何が古代人に珍重されていたのだろうか。この問題を考古資料で追及してみようとするのが、小稿第一の目的である。いっぽう民俗例によると、しゃこがいが一対噛み合った口の曲線が交差する線を連想させ、これが魔除けの呪力を持つとされる<sup>4</sup>。他に、噛み合わせの波状曲線が古い厨子甕の波状文線に似ていて魔除けになる、半開きの口で魔物を食べてしまう、ともかく二枚貝というものはことほど左様に淫靡なもので魔力を持つのだ、等々の解決がある。これら豊富な民俗例と考古資料にみるしゃこがいとは、何か関わるところがあるのだろうか。これを考えてみようというのが、小稿

第二の目的である。

以下、前半で第一の問題を、後半で第二の問題を考え、最後に時代を通して改めてしゃこがいの文化的意味を考えたいと思う。

## 二、考古資料にみるしゃこがい

### 1. “しゃこがい”とは

“しゃこがい”は“しゃこがい科”の貝の総称である。南島にみられるおもなしゃこがいは下記の6種である<sup>5</sup>。

1. オオジャコ *Tridacna gigas* (Linnè)
2. シラナミ *Tridacna elongata* (Lamarck)
3. ヒメジャコ *Tridacna crocea* Lamarck
4. ヒレナシジャコ *Persikima Derasa* (Roding)
5. シャゴウ *Hippopus hippopus* (Linnè)
6. ヒレジャコ *Tridacna squamosa* Lamarck

これらのうち1と4を除くしゃこがいが、遺跡に一般にみられる貝である。最も多いのは2・3・6のシラナミ、ヒメジャコ、ヒレジャコである。これらは沖縄方言でアジケーと総称されている。

上記3種類について説明を加えよう(図1参照)。貝の大きさは、それぞれの種内で変異があるものの、一般的な傾向として最も小型なのがヒメジャコ(最大殻長9cm前後)、大型がヒレジャコ(最大殻長40cm前後)、その中間がシラナミである。貝殻表面に円く大きなヒレ状鱗片がフリルのように並んでいるのはヒレジャコである。反対に表面にヒレ状突起が無く、細かい波状文様が並び、つるりとしているのはヒメジャコ。シラナミはその中間で、小さなヒレを持つ。平面形状ではヒメジャコ・ヒレジャコが扇状をなすのに対し、シラナミは蝶番ちようつかいが左右に広く開いて平行四辺形に近くなる。貝を側面からみると、ヒレジャコはややペタンとしているが、ヒメジャコ・シラナミはよくふくらんでいる。貝を内側からみると、腹縁部の波形のゆるやかなのはヒレジャコ、もっとも激しいのはシラナミ、その中間がヒメジャコである。貝殻のぶ厚いのは、ヒメジャコ・シラナミ、薄手なのがヒレジャコ。これらは皆海底の岩や珊瑚底に靱帯で付着し、“立位”で生息しているため、付着用の筋肉(足糸)が発達している。貝殻を蝶番側からみると、大きな足糸孔がある。

ヒメジャコは珊瑚礁の岩に穴をあけて入り込んでおり、干潮時干上がるような浅いところから水深5m未満の海中にすむ。岩のなかで波状の口を小さく開け、ここから外套膜を大きく広げてプランクトンを食べている。外套膜はエメラルドグリーンやブルーの螢光色で、ヒメジャコのいる海底はさながら海中に青いモールを飾ったようである<sup>6</sup>。シラナミはやや深い(潮間帯から水深20mくらい)岩礁の表面に筋肉によって付着している。珊瑚礁上にわずかな凹地をつくっては

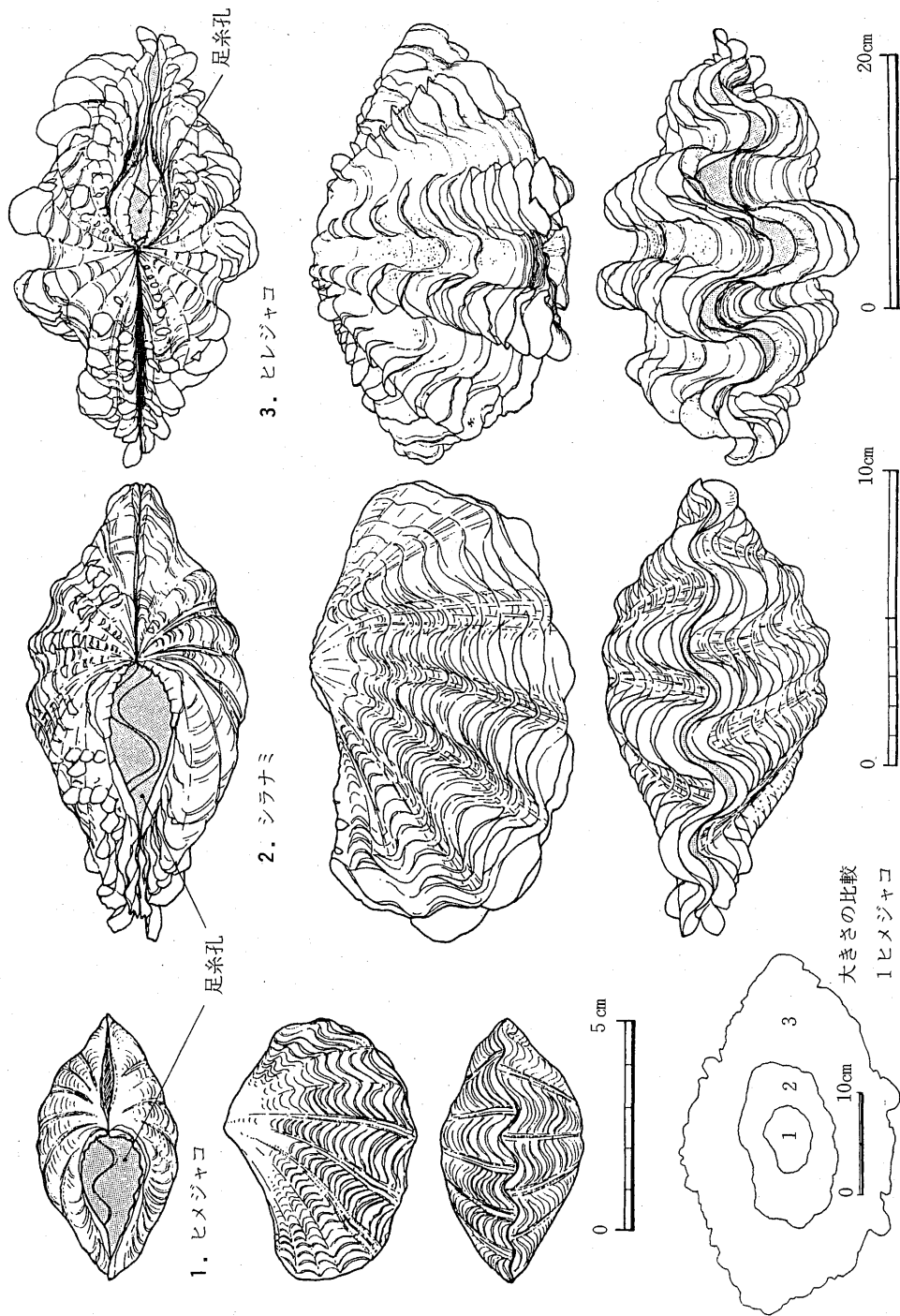


図1 シャコがい3種

いっている程度で、本体の大部分は露出しているので採集しやすい。ヒメジャコと同様、狭い口から外套膜を広げて生息している。外套膜の色彩は褐色系統。ヒレジャコは珊瑚礁の砂地の海底に、枝珊瑚の堆積に埋もれるようにしてすむ。狭い口から外套膜の色彩は黒灰色系統。

これらの貝に共通しているのは、いずれも海底に付着して小さく口を開き、ここから鮮やかな外套膜を広げて生きていることである。しゃこがいの外套膜内には共生藻類が培養されいて<sup>7</sup>、このために外套膜は螢光色を発する。これが海中でネオンサインのように光って、ひときわ目をひくのである。しゃこがいの海中のこの姿は貝殻からはちょっと想像しにくい。外套膜の中には、くっきりと一孔をうがった“眼”があり、近づいて来る人間や魚の影を敏感に感じとる。影に反応してまたたく間に外套膜を殻内に退縮させ、口を固く閉じてしまう様子はドラマチックでさえある。貝柱が殻のほぼ中央にあって大きいので、殻を閉じる力はとても強い。また一旦閉じてしまった貝殻は容易に開かない。

## 2. しゃこがいの利用

遺跡にみられるしゃこがいを、加工の程度、出土遺構・用途で分類し、しゃこがいの選択基準・文化的価値を整理すると、下記ようになる。

表1. 遺跡にみられるしゃこがいの分類

加工の程度による分類	出土遺構または用途別分類	選択基準・文化的価値	
A. 非加工	a 貝塚のしゃこがい	— 食料	味覚による選択, 栄養的価値
	b 墓地のしゃこがい	— 葬具	
	c 貝集積遺構に伴うしゃこがい		
	d 住居跡のしゃこがい		
	e その他の遺構に伴うしゃこがい		
B. 雑な加工	有孔製品	— 錘	実用的価値, 儀礼的価値か 材質による選択
		— 葬具	
C. 丁寧な加工	a 工具		実用的価値, 材質による選択
	b 装身具	— 腕輪等	実用的価値, 材質による選択
	c 装飾品等		実用的価値

ここで検討しようとするしゃこがいは、上表において、用途や選択基準・文化的価値が不明なため空欄になっているA—b・c・d・eの4種である。A—b墓地, c貝集積遺構, d住居跡, eその他の遺構に伴うしゃこがいのうち、これまでの検出例が最も多く、しゃこがいの文化的価値の主体をなすとみられるものは、b墓地のしゃこがいである。以下b～eのそれぞれについて述べよう。

## 3. 墓地のしゃこがい

現在南島の遺跡において、人骨としゃこがいの共伴例は20ある。これらがすべて墓地であると

厳密にはいえないが、ここでは同列にあつかうことにしたい。表2は人骨に伴ったしゃこがい一覽である。以下これに基づき、説明を加えていこう。

表2. 墓地（人骨）に伴ったしゃこがい

No.	遺跡名	所在地	時期
1	具志川島遺跡群岩立地区	沖縄県島尻郡伊是名村	沖縄前期—中期
2	安座間原第一遺跡（埋葬遺構地区）	沖縄県宜野湾市真志喜	沖縄前期末—中期末
3	木綿原遺跡（Ⅲ層）	沖縄県中頭郡読谷村渡具知	沖縄中期末—後期初頭
4	具志原貝塚（二次調査南地区）	沖縄県島尻郡伊江村具志原	沖縄後期前半
5	安座間原第二遺跡	沖縄県宜野湾市真志喜	沖縄後期前半
6	嘉門貝塚	沖縄県浦添市城間	沖縄後期前半
7	古座間味貝塚シル地区	沖縄県島尻郡座間味村	沖縄後期か？
8	西底原遺跡D地点	沖縄県島尻郡渡名喜村	沖縄後期後半
9	カラクブリ1号墓	沖縄県国頭郡宜野座村漢那区	グスク時代
10	シドゥフチ森南側のガマ5号洞穴墓	沖縄県国頭郡宜野座村惣慶区	グスク時代—近世琉球
11	沢岬親方の墓（イーヘー墓）	沖縄県那覇市繁多川	16世紀前半
12	シドゥフチ森南側のガマ4号洞穴墓	沖縄県国頭郡宜野座村惣慶区	古琉球—近世琉球
13	宜野座ヌ村ガマ遺跡岩陰遺物出土地点	沖縄県国頭郡宜野座村宜野座	古琉球—近世琉球
14	喜友名山川原西方丘陵の周縁古墓群	沖縄県宜野湾市喜友名山川原	古琉球—近世琉球
15	渡名喜島南部落（南1号人骨）	沖縄県島尻郡渡名喜村南	古琉球—近世琉球
16	タマイ屋ヌ墓のガマ1号岩陰墓	沖縄県国頭郡宜野座村漢那区	近世琉球か
17	古我地原内古墓（伊波仲門門中墓）	沖縄県石川市伊波	近世琉球
18	上・下勢頭古墓群P—1号墓	沖縄県中頭郡北谷町	近世琉球
19	大富洞穴	沖縄県八重山郡竹富町	不明
20	ナゴ浜	鹿児島県大島郡笠利町万屋	不明

小稿に関わる沖縄の時代区分は、下記のように行った<sup>8</sup>（表6参照）。

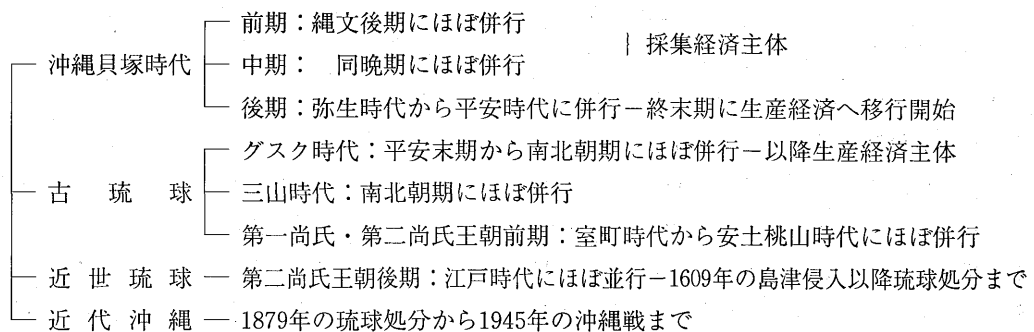
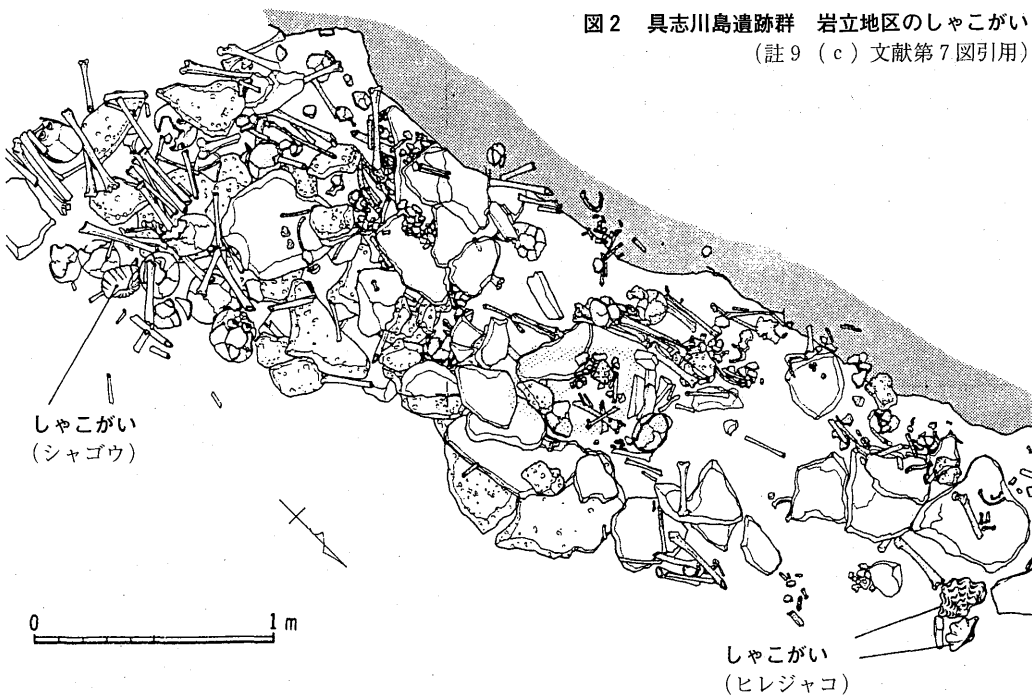


図2 具志川島遺跡群 岩立地区のしゃこがい  
(註9 (c) 文献第7図引用)



## 1. 具志川島遺跡<sup>しいたち</sup>岩立地区<sup>9</sup> (図2)

遺跡は小島の石灰岩崖下に形成された岩陰墓である。1975年から1992年までの8次にわたる調査によって、数十体分の人骨が検出された。時期は縄文後期から晩期併行期のいずれかの時期である。共伴の土器に恵まれなため、具体的な時期比定に至っていない。

墓地は過去の度重なる落盤や砂採りによる破壊で、岩陰の奥壁にそった狭い部分が遺っているにすぎないが、ここで一次・二次葬の人骨、さらに焼けた骨片が折り重なって検出された。人骨はビーチロックや珊瑚礁塊、石灰岩礫を用いた簡単な石囲いや敷石を伴っている。該遺跡は現在沖縄で知られる最古の岩陰墓である。

しゃこがいは人骨に混在して9個出土した。ヒレジャコ2、シャゴウ3、シラナミ3、ヒメジャコ1で、ヒメジャコの内側には焼けた頭骨片が密着していた。落盤等の攪乱のため、人骨としゃこがいの本来の位置関係を復元できない。

## 2. 安座間原第一遺跡<sup>あざまばる</sup> (埋葬遺構地区)<sup>10</sup> (写真3. 4)

遺跡は標高4～5mの海岸低地の微高地につくられた、縄文晩期併行期を中心とした墓地である。1985年から5年がかりで1300m<sup>2</sup>に及ぶ調査を実施した結果、43基の墓とその他の関連遺構が検出された。南島では初めての墓地の大規模調査である。開地に箱式石棺墓、石囲い墓、列石墓、土墳墓がつくられ、一次葬、二次葬・焼骨の跡が認められた。幸い筆者は報告書作成に関わる機会に恵まれ、しゃこがいの使用状況の分析を行うことができた。表はその一覧である<sup>11</sup>。



表3. 安座間原第一遺跡（墓地）のしゃこがい一覧

位置	大型しゃこがい	小型しゃこがい	破片のしゃこがい
地上標識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・腰に当たる位置（41）</li> <li>・胸に当たる位置（43）</li> <li>・足先に当たる位置（53）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・腰に当たる位置に2個（34）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頭部付近に大型片（15）</li> </ul>
埋土中		<ul style="list-style-type: none"> <li>・腹部上位（1・8・12・18）</li> <li>・頭部上（38）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頭部付近（1・8・14・13・16, 13, 16は2個）</li> </ul>
人体に伴う*	<ul style="list-style-type: none"> <li>・左側、この外側、右上に各1個ずつ、立位（32）</li> <li>・左右に立位（41）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（12）</li> <li>・寛骨中央部（16）</li> <li>・（12）</li> <li>・散乱骨に伴う（35）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大型貝の破片を右側に配置（38）</li> <li>・右側に大型破片1，小破片1，左上方に破片2（32）</li> <li>・大型貝の破片（17）</li> <li>・左腕上に他の貝と共に載る（52）</li> <li>・（12）</li> <li>・散乱骨に伴う（1・28・35）</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・足元右の配石外に立位（16）</li> <li>・人骨下位出土か（19）</li> </ul>		

\*接触あるいは付近に配置，（ ）内は人骨番号

43基の墓の内17基にしゃこがいの使用がみられる。しゃこがい使用率は40%である。使用方法は、地上標識として用いるものと、墓壙内の遺体に配置するものとの二つがある。地上標識として1個あるいは一対のみ伴うもの、人体に1～3個を配置するもの、地上標識・人体配置貝の両方伴うもの、の別がある。地上標識は墓壙のちょうど中央に当たる位置に、多くは標石（珊瑚礁など）と共に置かれる。人体に配置される貝は頭部に集中する傾向があり、次に胸・腰といった胴体に多い。しゃこがいは形の大小を問わず使用されているが、地上標識や頭部への配置には大型貝が好まれたようである。破片のしゃこがいが、完全な貝と同様に使用されていることも注意

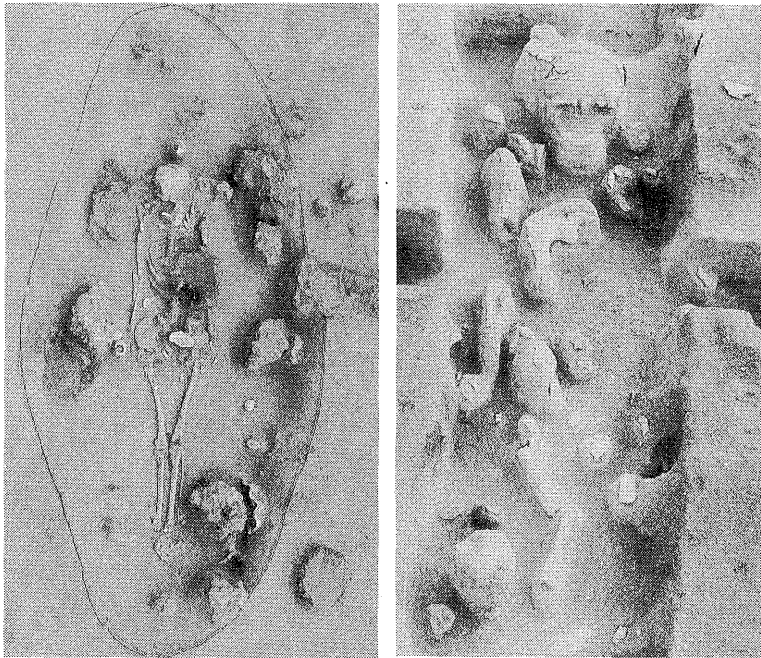


写真3 安座間原第一遺跡のしゃこがい

1. 16号人骨（壮年女性  
仰臥葬）下腹部上と足もとと左側にしゃこがい。
2. 17号人骨（熟年女性、  
仰臥葬）胸の上に大型しゃこがいの破片  
（呉屋義勝氏提供写真）

1

2

される。貝の置き方には立位と水平位があり、後者が多い。後者の半数以上は貝の内側を上に向けて置かれている。この傾向は、同様に配置された他種の貝をも合わせてみると一層顕著である。貝の内側を意識的に上に向けていたらしい。しゃこがいの配置は男女年齢の区別なくみられるが、配される位置や数は個体ごとにかなり差がある。以下使用状況のはっきりしている3列について見ていこう。

32号人骨（以下32号と記述）と41号は上下に重なって検出された伏臥（うつぶせ）の埋葬遺体である。下位の41号が小稿冒頭に述べた人骨である。41号は壮年男性で、両腕を伸ばし脚をわずかに屈曲させて、傾斜角25度の墓壇に頭部から突っ込むように葬られていた。大きなしゃこがい一対が、41号の頭部を両側からすっぽり包むように、墓壇底に据えられている。地上には身体の中央に当たる位置に立法体のやや大きな石が標識のように置かれ、大型しゃこがいが1個これに伴っていた。人骨の腰右側にヒメチョウセンフデ製品が1個伴い、他に副葬品は無かった。

32号墓は41号墓の地上標識の置かれたレベルより10～20cmほど上位に底面をもつ土壌内である。32号の底面に41号墓の影響はみられない。32号は脚と腕を伸ばし、うつぶせで水平に横たわった熟年女性である。頭部両側には大型しゃこがいが41号と同様に立てられていた。頭部右上方にはさらに別の大型しゃこがいが1個立てられ、左上方にはヒメジャコが1個、しゃこがい破片が2個みられる。珊瑚礁を長方形にめぐらせた地上標識をもち、これに打ち欠かれた巻貝や有孔二枚貝が伴っている。

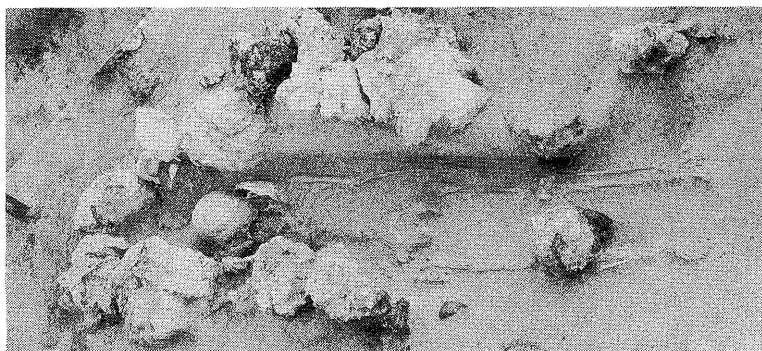
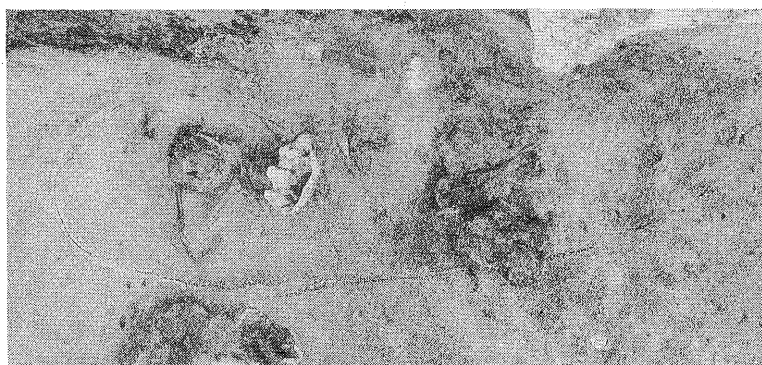
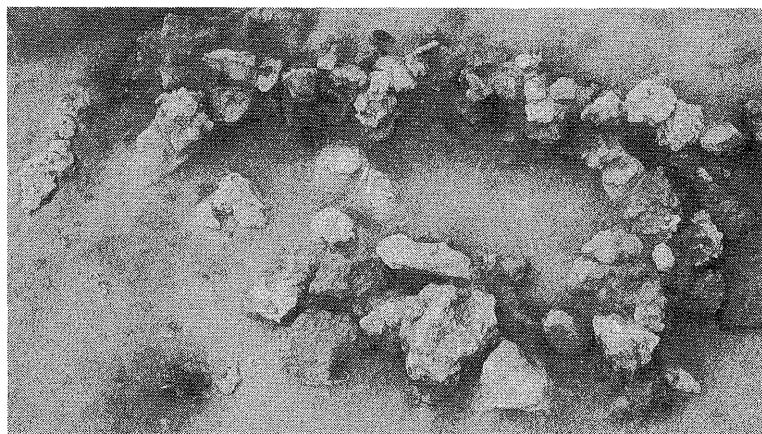


写真4 安座間原第一遺跡のしゃこがい

1. 32号人骨(熟年女性, 伏す臥葬)。頭の両側に立位のしゃこがいが見える。



2. 43号人骨(壮年女性, 伏臥葬)。背中の上に大型しゃこがいのる。



3. 34号人骨(壮年男性, 仰臥葬)。地上標識のしゃこがい2個が見える。  
(以上呉屋義勝氏提供写真)

43号は土壙墓に埋葬された成人女性である。伏臥伸展葬で、大型しゃこがいが背中中央部に、内側を上に向けて置れていた。

以上の41・32・43号は互いに接して並行に並んでおり、時期的にも近い関係にあると見られる。調査者の呉屋義勝氏の墓域区分によれば、伏臥葬の多いことで特徴づけられる墓群に属している。安座間原第一遺跡において、しゃこがいの使用は墓全体の4割に及び、性・年齢を問わずみられることから、この習俗はかなり一般的かつ、ことに伏臥葬において顕著であったといえる。

### 3. 木綿原遺跡 (Ⅲ層)<sup>12</sup>

(図3)

遺跡は東シナ海に面した標高4～5mの海岸砂丘に立地している。砂採りによる破壊を免れた狭い範囲に箱式石棺7基、土壙墓2基が検出された。弥生時代末から中期並行期の墓地である。遺構は径4mほどの空き地をとりまくように半円状に並び、空き地の中央にはいもがいの集積(7個)がみられた。9基の遺構中しゃこがいに伴うものは4基、使用率44%である。

1号人骨(以下1号と略記)は土壙に埋葬された熟年女性である。仰向けに腕と脚を伸ばしており、頭上に打ち欠き痕をもった大型しゃこがい、内側を上に向けて配置されていた。貝製指輪1個が副葬され、足の上位層から有孔珊瑚磔が10個出土している。

3・3'・3"号は同一箱式石棺に埋葬された遺体である。石棺の周辺で、打ち割られた弥生土器に似た壺が出土している。3号と3"号は合葬された成人と小児で、成人の足元近くに小型しゃこがいが置かれていた。3'号はこの2体の下で検出された壮年男性である。木綿原遺跡唯一の伏臥葬で、内側を下に向けた大型しゃこがい2個が男性の足首と足先を覆っていた。冒頭に引用した当真嗣一氏の貝の呪力に関する解釈は、本例をとくに意識されたものであろう。この遺体の頭部下にはサラサバテイが巻貝の頂部を上に向けて置かれており、この尖った先端がうつぶせになった遺体の額中央に当たっている。埋葬時の状況を想像すると不気味である。

9号は箱式石棺に埋葬された成人男性である。腕と脚を伸ばした仰臥位で、全身に多くの貝が置かれていた。配置された貝はしゃこがいとクモガイの破片である。それらの位置は眉間、右耳上、左耳付近、右鎖骨上、左脚付け根(大腿骨近位端)、大腿骨の間(転落か)、両膝付近、左脚上(脛骨上)で、内側を下に向けたものが多い。報告書の写真と図から判断すると、これらのほとんどはしゃこがいである(10個以上)。該人骨では両目を塞ぎ、頭部、関節部、右側に集中す

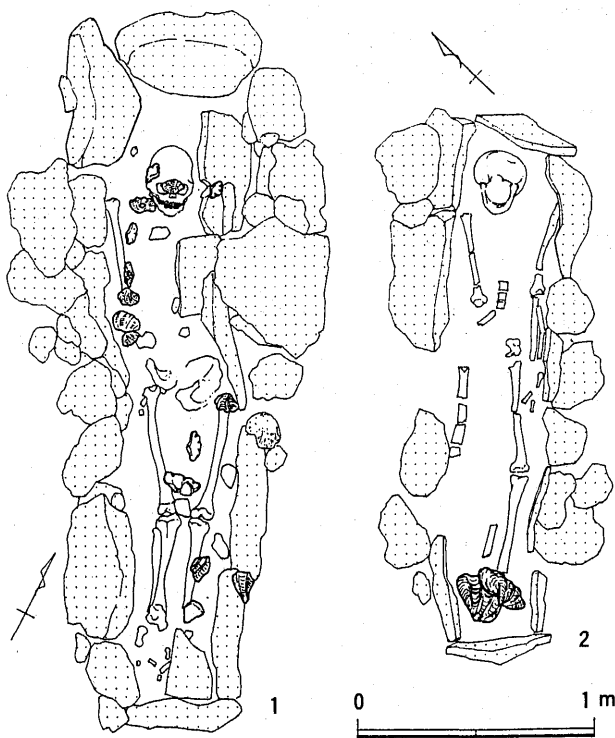


図3 木綿原遺跡のしゃこがい

1. 9号人骨(成人男性、伏臥葬)

2. 3'号人骨(壮年男性、伏臥葬)

(註3文献をもとに作成)

る配置傾向が明らかである。

12号は以上の墓とはやや離れた位置にある箱式石棺である。著しく破壊されるが、石棺外の頭部近くに小型しゃこがい1個を認める。

木綿原遺跡でもしゃこがいの使用は4割を越えており、この習俗は一般的だといえる。使用が特定個人に集中する傾向、ことに伏臥葬に顕著なのは安座間原第一遺跡に共通する。またここでは貝を下向きに置く傾向がみられた。空き地中央のいもがい集積に、中型のしゃこがい1個伴っているのが注意される。

#### 4. 具志原貝塚（二次調査地区）<sup>13</sup>

標高7～10mの海岸砂丘に立地する、弥生後期から古墳時代併行期の遺跡。1984年の調査で南区Ⅱトレンチ7層で3～4体分の散乱人骨が検出された。人骨は4m四方の範囲に散在し、骨片に伴って有孔メンガイが86個出土した。報告書の図から判断すると、他に珊瑚小礫、巻貝、小型しゃこがい（1個）が伴っている。

#### 5. 安座間原第二遺跡<sup>14</sup>

東シナ海に面した標高4～5mの微高地上につくられた遺跡で、弥生後期併行期の集落跡と小さな墓地である。先の安座間原第一遺跡の西約50mにある。集落の南西端で家犬を埋葬した遺構がみつかった。概報の写真では、大型しゃこがい3個が犬の骨を蔽い尽くしている。しゃこがいの上にイトマキボラらしい巻貝が1個載っている。

集落からやや離れた東区で、同時期の墓2基と散乱人骨が検出された。2号墓は大きな珊瑚塊を集めて地上標識とした覆石墓で、覆石近くに大型しゃこがい1個添えられていた。覆石下には浅い土壌が掘られ、小児が埋葬されている。ただし土壌内に遺された骨が背骨と手足の一部のみであったことから、調査者は「腐敗の進行する段階で背・右腕・左足のみが個別に配置された」可能性を示している。そうであれば、異常な埋葬である。

#### 6. 嘉門貝塚<sup>15</sup>

遺跡は標高2～3mの東シナ海に面した、海浜砂丘が赤土地帯に湾入するところに形成されている。弥生後期から古墳時代並行期の層で炉跡、貝集積遺構、人、犬の墓が検出されている。概報によると、葬られたのは壮年女性で、写真にはうつぶせの肩と胴部に2・3個のしゃこがい写っている。

#### 7. 古座間味貝塚シル地区<sup>16</sup>

遺跡は沖縄本島西方約30kmの座間味島南海岸の、標高4～5mの海岸砂丘にある。1977年の採砂工事によって、5体の人骨が発見されている。翌1978年知名定順氏ら沖縄国際大学考古学研究グループが現地を訪れ、人骨出土時の状況を確認し、また表面調査によって新たに2体の人骨を採集している。知名氏らの聞き取りによると、1977年に出土した人骨の1体は長方形の板状珊瑚に囲まれていて、周辺にしゃこがい置かれていたという。また78年調査時に、同一地点でしゃこがい数点が採集されている。

1981年の同地区発掘調査によって、1体の散乱人骨が検出された。報告書の写真には下顎骨に

接して中型のしゃこがいが見える。

当遺跡の8体の人骨は、いずれも共伴する土器が無いため具体的な所属時期を決めることができない。しかし現場に箱式石棺らしい遺構があったこと、人骨を鑑定された佐野一氏による「石器時代人の可能性が高い」という所見、3体の下顎骨に切歯4本を抜去する風習的抜歯が認められること（松下孝幸氏による）を考慮すると、これらは沖縄貝塚時代に属する可能性が高い。

#### 8. <sup>にしすくばる</sup>西底原遺跡D地点<sup>17</sup>

遺跡は本島西方海上約60kmの渡名喜島の、標高7mの平坦な砂地にある。D地点から古代併行期の墓が8基検出された。このうちの第6号人骨に有孔しゃこがい多数伴っていた。遺体は熟年男性で、腕をのびし、膝を曲げ、これを左右に大きく開いた姿勢で埋葬されていた。本来足先を揃えた立膝葬だったのであろう。有孔貝製品は18個、このうちしゃこがい製が15個、他の3個は同じ大きさのメンガイ製品である。調査者の当真氏によると、これらは「人骨の各関節部から検出され」ており、報告書の写真では膝、足首、手首、肩への配置が確かめられる。人骨を鑑定された佐野一氏は「全体としてやや病的なところがある」という所見を述べられた。

#### 9. カラクブリ1号墓<sup>18</sup>

石灰岩地形の発達している宜野座村では、ウバーレやドリーネが発達しこれに付随する岩陰や洞穴が墓としてさかんに利用されている。本遺跡は洞穴状をなす、中世併行期の岩陰墓である。洞穴内の遺物包含層から大小の貝殻、骨片、フェンサ上層式土器が出土した。岩陰墓の奥壁近くに大型しゃこがいが見られた。

#### 10. シドゥフチ森南側のガンマ5号洞穴墓<sup>19</sup>

陥没ドリーネにつくられた洞穴墓である。古代末・中世から近世併行期に至るまで「遺体安置所、あるいはシルヒラシクマ（白骨化させる場所）として使用された墓」とされる。洞穴内には岩の裂け目に沿って人骨がびっしり埋まっており、しゃこがい、たからがい、土器片、陶器片が伴っている。蔵骨器や棺材らしいものは発見されていない。

#### 11. 沢岬親方の墓（イーヘー墓）<sup>20</sup>

沢岬親方は尚真王代の三司官（大臣）で、嘉靖元年（1522年）に慶賀使として明に渡った時の功によって、寿墓の与えられた人物である。墓の上の石碑銘文には、嘉靖4年（1524）に墓碑を建立したことを記す。墓の年代は16世紀前半、古琉球の時期である。

大嶺薫氏の報告によると、墓室内は大きく二つに分かれ、それぞれ一室・二室と仮称されている。一室は骨甕をたくさん安置する単純なつくりの部屋。二室は仕切りの石垣によってさらに前後二室に分かれる。前の部屋はシルヒラシドコロ（遺骸を白骨化させる場所）、後ろの部屋は豪華な納骨室である。納骨室の奥壁に沿って左右にそれぞれアーチ形の門をもつ三つの小納骨室が並ぶ。三門の正面にはそれぞれ「右穆」「上中」「左昭」の文字を刻んだ石板がはめこまれている。

これら三室の境に、しゃこがい立てられていた。これについて大嶺氏は次のように述べておられる。「内部区分の境にシャコ貝（アジケ貝）が立てられていたが、それは昔からアジケは魔

よけとして境界に立てたと伝えられるが、四百年前に其の風習があったことがわかる。」

## 12. シドゥフチ森南側のガマ4号洞穴墓<sup>21</sup>

陥没ドリーネ内の横穴を利用した洞穴墓である。洞穴内の遺物包含層からグシク土器、骨片、青磁、たからがい、オオベッコウガサ、ハマグリ、木棺の一部が出土している。古代末・中世から近世に至る間、使用された墓とみられる。墓の入り口の左端に「大きなヒレジャコが片方のみうつぶせになって置かれている」。「4個の礫でシャコ貝の周囲を囲ったかのようにみれる」。洞穴の入り口は礫が低く積まれ、外側すぐ下は低い段落ちのテラス状になっている。そこからも、しゃこがい、凹石等の遺物が検出されている。

## 13. 宜野座又村ガマ遺跡岩陰遺物出土地点<sup>22</sup>

大型の陥没ドリーネに形成された岩陰墓で、古代末～中世に至る時期の遺跡である。骨片に混在してしゃこがい、ハマグリ、ヤコウガイ、オオベッコウガサ等が多量に検出されている。

## 14. 喜友名山川原西方丘陵の周縁古墳群30号墓<sup>23</sup>

遺跡は隆起珊瑚礁の丘陵に掘り込まれた横穴墓である。30号墓は喜友名グスクの真下に穿たれており、切石作りの羨道を伴う。横穴は幅2.6m奥行き3m弱、墓前庭の左側壁に「野面石で密閉された墓口高約50、墓口幅80、奥行き60cmの小穴があり、幼児骨であろう長管骨がシャコガイ殻に配置されている」。墓内に東南アジア製陶器がみられる。中世から近世併行期の墓か。

## 15. 渡名喜島南部落（南1号人骨）<sup>24</sup>（図4）

立膝仰臥葬の30歳代の男性である。仰向けになった腹部上に大型しゃこがいが一対置かれていた。しゃこがいは腹縁部を向い合わせて、内側を下向きにしている。キセル雁首、黒釉陶器壺、石製分銅が副葬されていた。近世併行期の埋葬である。

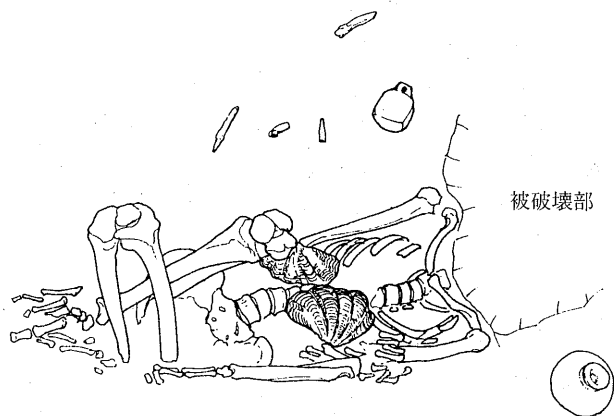


図4 渡名喜島南部落南1号人骨のしゃこがい  
（註60文献写真をもとに作成したスケッチ）

## 16. タマイ屋又墓のガマ1号岩陰墓<sup>25</sup>

ドリーネ内につくられた岩陰墓である。奥壁を小礫で半円形に囲んで遺体安置場としている。石囲い内にはヒレジャコが内側を下向きにして置かれていた。貝殻に摩擦や破損のないことから、報告者は「採取後まもなく墓内に持ち込んで安置した」としている。ドリーネに流入する水の入り口にも同様のしゃこがい置かれている。墓内に骨片は散乱するが他の遺物がみられず、時期を比定できない。同じガマ（ドリーネ）内の洞穴墓にはボウジャーガミ（骨甕）が

納められているので、ガマの利用をこれとセットにして考えると、岩陰墓の時期は近世併行期か。

#### 17. 古我地原内古墓<sup>26</sup> (伊波仲門門中墓)

国頭礫層と琉球石灰岩の不整合面にできた岩陰を掘り抜いて作った、近世併行期の墓である。洞穴入口の一部は石積みで蔽われ、その中央に切石を用いた羨道と入口が造られている。入口付近の表面は目地にセメントや漆喰が塗られ、中に25基の石厨子を納めている。内3基に乾隆年間(1736-95)の銘があった。羨道と墓室内の入口近くの2か所にそれぞれ穴を掘ってブタの頭骨が埋められており、後者は大型しゃこがいによって覆われていた。座間味政光氏は、ブタの頭骨が双方ともに顎部を外側に向けていたことを指摘して、「入口を意識したことには間違いない」としている。なお墓築造時、羨道に埋めたとみられる寛永通宝が6点検出されている。形状から見ると年代の降るものも含まれていて、その時期は石厨子の年代と矛盾しない。

#### 18. 上・下勢頭古墓群P-1号墓<sup>27</sup>

フィンチャーとよばれる岩陰墓、内部に厨子甕を安置した近世併行期の二次葬墓である。石灰岩丘陵のテラス状崖下を珊瑚礫を積み上げて囲い込み、上部を開口させている。墓の前から対になったしゃこがい<sup>せと</sup>が2組出土した。これらは同一地点で上下に分かれて出土している。上位の一組は上半分を積石上に露出させており、下位の一組は積石下の土中に埋もれていた。両者は時期を異にする。しゃこがいについて調査者の中村愿氏は「シーサー(獅子)の機能と同じくして悪災よけとして置いたものであろうか」と述べておられる。

#### 19. 大富洞穴<sup>28</sup>

西表島東南部、標高28mの台地上の石灰岩鍾乳洞内の遺跡である。近世には風葬墓であったらしい。奥の小空間に54×80cmの楕円形の凹地があり、そこに有孔しゃこがい<sup>せと</sup>が46個集中していた。時期は不明。

#### 20. 万屋ナゴ浜<sup>29</sup>

1933年冬に南島の人骨採集旅行に出た三宅宗悦氏が、万屋砂丘でしゃこがい<sup>せと</sup>を枕にした人骨を発掘されている。時期は不明。今のところ奄美諸島で知られる唯一のしゃこがい<sup>せと</sup>使用例である。西北頭位の仰臥屈葬人骨で、周囲には獣骨、陶器片が散乱していたという。発見の状況を記した文章を引用しておこう。「頭骸骨を取り上げて副葬品でもと探ると、手に触れた堅いものがある。砂を除けてみると貝だ。シャコ貝(方言名スワロ又はスワリ)だ。シャコ貝を枕にして葬られていたのだ。南らしい埋葬法、今迄自分の掘った古人骨中で、一番印象的なものだ。」

### 4. 貝集積遺構に伴うしゃこがい

特定の種類の貝(ゴホウラ、いもがい、マガキガイ)を複数個土壌内に集め、あるいは積み上げた状態の遺構を、貝集積遺構という。沖縄中期から後期(縄文晩期から古代併行期)の沖縄諸島で多数検出されている。ゴウホラやいもがいは、同時期の北部九州弥生社会で珍重された腕輪の材料でもある。貝集積遺構のある遺跡にしばしば弥生土器や弥生文化の文物が伴うことから、これらの貝集積は、両地間の貝交易を示す“商品ストック”と考えられている。貝集積遺構の中



にときおり、しゃこがいがあった1個伴っている。表4はしゃこがいを伴う貝集積遺構一覧である。<sup>30</sup>

表4. しゃこがいを伴う貝集積遺構

遺跡名	時期	集積された貝, その他
1 木綿原遺跡	沖縄中期末-後期初頭	いもがい7, 墓地内の空地中央で検出
2 具志原貝塚5号集積	沖縄後期前半	いもがい14, 付近で人骨検出
3 宇堅貝塚A地区 <sup>31</sup>	沖縄後期前半	いもがい12, ゴホウラ1
4 嘉門貝塚	沖縄後期前半	いもがい, ゴホウラ(数未詳), 付近で埋葬人骨検出

貝集積遺構では一度にたくさんの貝を並べあるいは積み上げるので、貝の山は崩れやすい。表4の4遺跡の多くもやや雑然としたまとまりで、共伴のしゃこがいは転げ落ちていいる。比較的原状を保っているとみられる集積遺構は、具志原貝塚5号集積<sup>32</sup>である(図5)。規則的に積まれたいもがい集積の頂上に、しゃこがい1個載っている。

注目されるのは墓地の空地中央に貝集積のみられた木綿原遺跡で、貝集積と葬送との関連を考えさせる。また表4の、宇堅貝塚を除く3遺跡の貝集積遺構の近くでも人骨が出土している。そこでこれまでに知られる貝集積遺構をもつ遺跡14例について調べたところ、人骨を伴う遺跡は9例であった。調査範囲の大小を考慮にいと、この数値はかなり高い。木綿原遺跡に象徴されるような、貝集積遺構と墓の結び付きは、特殊な例ではないのかもしれない。

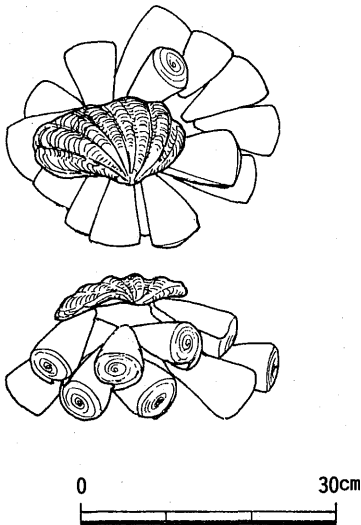


図5 貝集積に伴うしゃこがい  
伊江島具志原貝塚5号集積  
(註13文献をもとに作成)

## 5. 住居跡のしゃこがい

古座間味貝塚<sup>33</sup>の沖縄前期末-中期(縄文後期末-晩期併行期)の層で、3棟の石組方形の竪穴住居が検出されている。3棟は互いに接しており、これらの周囲に大・中型しゃこがいかなりたくさん見受けられる。入口付近にあれば、あるいは後世の使用例に通じるものか、と思ったがそのような傾向は認められなかった。多くは石組の間に混在しており、住居を支える石組の材料のひとつとして用いられたようである。

ナガラ原西貝塚<sup>34</sup>(沖縄県島尻郡伊江村所在)は、伊江島の南海岸に面した標高5~7mの砂丘に立地する沖縄後期前半(弥生後期-古墳前期併行期)の遺跡である。方形の建物跡を示す柱穴が多数検出された。柱穴は径13~26cm、深さ20~34cmの円形で地面に垂直に掘りこまれていた。この中にしゃこがい1~2個入れた柱穴が数基あった。調査を担当した安里嗣淳氏は「柱を建てる際

のクサビとして用いられたものであろうか」としておられる。

**手広遺跡**<sup>35</sup>（鹿児島県大島郡竜郷町赤尾木牧・小泊所在）は、奄美大島の太平洋に面した標高4～10mの海岸砂丘に立地する複合遺跡。2次にわたる発掘調査が行われ、17層の堆積中に七つの文化層が確認された。一次調査の第2層下面（第一文化層）で、22基の柱穴を検出した。方形の建物を連想させる配列であったが、調査範囲内でプランを復元することはできなかった。柱穴の半分以上は人頭大の角石・割られた大石片・貝を伴っていた。これらの大半は柱穴の内壁寄りで検出され、さらに内壁に密着しているものもあって、その機能が柱の根固めであったことを示していた。このような貝のほとんどは大型しゃこがいであった。他に打ち割られたヤコウガイが一点みられた。ここではしゃこがいは、明らかにクサビとして使用されている。第一文化層の時期は兼久式期（古墳時代—古代併行期）である。

南島における住居の検出例は、近年の大規模な集落跡の発掘調査によってかなりの数にのぼっている。しかし住居跡にしゃこがいを伴う例はきわめて稀である。上記3例において、しゃこがいに抽象的意味を想定するのは困難であった。生活空間におけるしゃこがいはクサビなどの実用性を第一としたようである。

## 6. その他の遺構に伴うしゃこがい

**大原貝塚**<sup>36</sup>（沖縄県島尻郡具志川村所在）は久米島西部の海に南面する海岸砂丘にある。B地点において、室川式期（縄文後期末—晩期）の墓と集石遺構（SHO1遺構）が検出された。集石遺構は7～8m×3～4m（推定）の範囲に拳大から人頭大の礫を隙間無く敷詰めたもので、礫群中に大型しゃこがいやヒメジャコ、珊瑚円礫が若干含まれていた。人骨出土地点と集石遺構は接近しており、双方同一レベルで検出されていることから、調査を担当した当真氏は「集石遺構は埋葬と深い関わりをもつ」と見て、これを「埋葬に伴う葬送的儀礼を執り行う場所」とであろうと指摘されている。

## 7. まとめ

述べてきた事例をみる限り、しゃこがいの抽象的意味は、葬送行為に関連してのみ認められる。以下葬送行為に関わる使用を時代順にまとめてみよう。

しゃこがいの葬具的使用の最古例は、縄文後期から晩期併行期の具志川島岩立遺跡である。数個の大型しゃこがいが岩陰墓内の一・二次葬にともなっている。岩陰内では他の貝を交えず、しゃこがいのみを用いている点に注意される。使用のしゃこがいに左右一対のものではなく、ヒレジャコ、ヒメジャコ等貝種も様々である。しゃこがいの葬具的使用の上限はさらに遡る可能性がある。

縄文晩期から弥生時代併行期には、岩陰墓・洞穴墓・土壙墓の他に石棺墓、配石墓、列石墓などがみられ、また地上と地下の二重構造をもつ墓が現れる。一・二次葬の葬送形態にも変異が多くなり、これに伴ってしゃこがいの使用方法も多様になる。大小のしゃこがいが地上標識や地下の遺体に伴い、その利用率も全体の4割を越えて、この時期しゃこがいが葬具として定着したこ

とを示す。また身体上の貝の位置や向きも意識されていて、使用法の細分化がうかがわれる。この傾向は、しゃこがいの葬具的使用が飼犬の埋葬や、墓地と関わりを持つとみられる貝集積遺構や祭祀遺構にまで及んでいることでも了解される。因みにこの時期、しゃこがいだけでなく、他のいくつかの貝（スイジガイ、イトマキボラ、メンガイ、オオベッコウガサ等）も、墓地において明らかに何らかの葬具的役割をもっていたようである。

古代から中世併行期には、岩陰墓や洞穴墓の入口付近にしゃこがいを置く風習がみられる。古琉球になると屋根や壁を人工的に作った家形の土族墓（破風墓、平葺墓）が現れる。16世紀前半の土族墓には、最奥部に並んだ納骨室の境界にしゃこがいが置かれていた。しゃこがいを葬具として使用する習俗は、階層の上下を問わず継承されていたようである。

この時期注目されるのは、幼児葬に伴うしゃこがいの使用である。幼児骨（0～5才の骨）は遺りにくいので検出例が少なく、それ以前にこの風習がなかったと厳密にはいえないが、幼児としゃこがいの特別な関係がはっきりみられるのは、この古琉球期からである。

近世琉球期には、墓室内の入口付近にしゃこがいを埋めたり、入口外側に埋める事例が知られる。前代に墓室内奥の人骨近くにあったしゃこがいが徐々に墓外に移動していく様子が認められる。しゃこがいの口はそろって外側に向かっており、また対で使用されている。しゃこがいのもつ抽象的意味に何らかの変化の生じたことを考えさせる。

現在、墓にしゃこがいを置く習俗はほとんど姿を消してしまったようである<sup>37</sup>。

### 三、しゃこがいの呪力

#### 1. 考古資料に見るしゃこがいの呪力

##### (1) 選択の理由

しゃこがいは南島の貝塚の出現と同時にみられる、最も一般的な食用貝の一つである。南島の貝塚人が日頃からこの貝の生態に親しんでいたことは言を俟たない。彼らがしゃこがいに近づいてこれを採取する時、しゃこがいはすばやく外套膜を退縮して口を閉じ、灰色の海底に紛れてしまったはずである。しゃこがいのこのような生態的特徴が、人にドラマチックなイメージと想像力を与えたとしても不思議ではない。標本の貝殻を見て貝種を判断する我々と異なり、貝塚人は貝殻の背後に海中の動的シーンをただちに思い浮かべたであろう。このようなしゃこがいの特徴は、前述したように“海底に上向きに開いた口”“優れた危険察知能力”“嚴重な閉鎖性”“神秘的な容姿”である。しゃこがいの海中における生態的特徴こそ、人々にこれを特別の貝として選ばせるに至った主要な契機ではなかったか。

一方しゃこがいは貝殻としても造形的魅力を持っている。大きく、重厚で、華やかなしゃこがいは、印象の強い貝殻である。庭園内の置きものや絵画の小道具として洋の東西を問わず人気があるのは、このためであろう。葬送儀礼という人生の深刻なドラマの道具立てとして不足はない。しゃこがいの造形的派手さが、そのドラマ性を普及・存続させた要因だったとはいえないだろう

うか。

南島の貝塚人が葬送の具としてとくにしゃこがいを選んだのは、結局その生態的特徴と貝殻の造形的特徴に導かれたためだと考えたい。これが人の死と何らかの解釈を介して結びついている。両者の連結のポイントは“海底に開いた口”から連想される海底の奥の異界ではないだろうか。しゃこがいは異界と現実の世の通路を開け閉めする装置として認識されていたのではないかと考えてみたい。

### (2) しゃこがいと異常な死

先に指摘したように、墓地におけるしゃこがいの使用は平均的ではない。個体によって極端に集中するものとそうでないものの差が目立ち、しゃこがいを多く伴う被葬者の大半は、伏臥葬であった。南島においても伏臥葬は稀な葬法である。また彼らは頭部に貝の尖った頂部を当てられていたり、斜めに葬られていたり、関節部をことさらに貝で塞がれていたり、腕の上に貝を並べられていたり、不自然な二次葬であったりした。しゃこがいを伴う被葬者から受ける印象は、死の安静ではなく死の不気味さであり、異常さに対処しようとする残された人々の意志や感情である。

しゃこがいは、死の異常性に対する役割を負ってとくに使用されたのではないだろうか。私には被葬者の身体のある部分にしゃこがいを配することで、この異常さを具体的に処理しようとしているように見える。

### (3) しゃこがいは死霊の捕獲・封入の呪具

死者に伴うしゃこがいは、頭部、胸や腰などの胴体、手、足に集中して配されているが、これらの中でも頭部への集中が著しい。頭部両側に大型しゃこがいを立てたり、額や耳を覆ったりしている。安座間原第一遺跡41号人骨はしゃこがいに向かって斜めに頭を突っ込んでいた。これにしゃこがいのすばやく閉じる海中のイメージを重ねると、被葬者は海底のしゃこがいに捕獲されていると見立てられる。しゃこがいの口に海底の異界入口のイメージを重ねると、被葬者は異界へ引き込まれていると見立てられる。この場合、しゃこがいによって異界に封じ込められるべき対象は頭部に在る、とみなされたのではないか。人の死が異常であればあるほど、これを厳重に異界に封じ入れる必要があったのであろう。このようにして強引に異界に封入されるべき対象は、やはり、死霊であろう。

実際には異常な被葬者でなくても、しゃこがいは頻繁に用いられた。人々は、しゃこがいが動くモノに敏感に反応してすばやく口を閉ざす姿をイメージして、死霊が墓地空間を離れ、生活空間に行くことを防ぐつもりだったのではないか。死霊を異界に閉じ込めるための装置としてしゃこがいは葬具たりえた、と考えて、しゃこがいを“死霊の捕獲・封入の呪具”とみることにしたい。

### (4) しゃこがいは記号

しゃこがいが、海中で貝殻をすばやく閉じるイメージを売り物にした“死霊の捕獲・封入の呪具”だとすれば、実際にも対で用いられることが多かったはずである。しかし遺跡にそのような

しゃこがいはの使用ほとんどみられない。明らかに対を意識しているような使用状況においても、生物学上正しく番つがいになっているものは、近世の使用例を除いて無い。墓のしゃこがいを見る彼らの目に写っていたのは、たとえば海中での象徴的な容姿であり、これに死者の靈魂を重ねたイメージだった、と考えるのはどうだろうか。墓地において完全な形のしゃこがいと破片のしゃこがいが、たいした区別もなく使用されているのは、しゃこがいを観念として見るこうした習俗があったからではないか。墓地におけるしゃこがいは、すでに死霊捕獲・封入の“記号”だったといえないだろうか。

#### (5) 貝集積遺構に伴うしゃこがい

貝集積遺構の主体はゴホウラといもがいであるが、後者が圧倒的に多い。これらが外地（九州など）の貝殻消費に充てられる商品だとすれば、南島人は交易のためだけに条件の好い大きな貝をひたすら採集したに違いない。ゴホウラもいもがいも食用として利用価値のある貝であるが、貝殻の特定部位を貝符や貝輪等の製品加工に充てるために、とくに後者では殻口部等を欠いて中身を取り出すことができなかった。人々はおそらく、いもがいを採取してもその身を利用することなく、機械的に集め縛って砂に埋没させ、肉の腐るのをまったのであろう。このような“殺貝行為”に対し、これを墓地の近くで行うことによって、しゃこがいの呪力を借り、何らかの処理を施そうとしたのではないだろうか。これを南島人の素朴な配慮とみるのは想像が過ぎるだろうか。ちなみにゴホウラについては、製品加工の大半が南島でおこわれていたために原貝の輸出は少なく、採取後うまく身を取り出してこれを賞味し、粗加工を行ったと考えられる。

#### (6) 境界の呪具になったしゃこがい

貝塚時代におけるしゃこがいの死霊捕獲・封入の呪力は、沖縄本島が生産経済にはいったグスク時代以降徐々に変化し始める。グスク時代から古琉球期においても墓の形態は基本的に洞穴墓や岩陰墓で、しゃこがいの使用も継承される。ただ墓に石積の囲いを施すようになり、さらにこの一部に出入口を設けるようになる。墓地に石積みの壁や出入口ができたことは、それまで余り強く意識されなかった空間の境界意識を人々にもたらした。しゃこがいはいきおいこの境界を意識して配置されるようになる。古琉球・近世琉球期の墓には出入口を意識した位置にしゃこがいが置かれたり、石積みの外側に配されたりする。後者の場合しゃこがいは捕獲・封入すべき死霊の現場を離れて、その境界の外側に出ている。これらのしゃこがいは、魔除けとされるブタの頭骨を覆って墓室内に埋められ、また口を墓室外側に向けて対で埋められていて、そのスタイルは死霊の封入というより獅子など他の魔除けの呪具に近い。数年前、浦添市に遺る岩陰墓で、墓前面の石積み上に置かれた大きなしゃこがいを見た。現代につたわる、墓の呪具としてのしゃこがいの最後の姿ではないだろうか。

墓地に境界ができたことで、しゃこがいは死者から離れ、その呪力は墓地と他の空間を区切る境界に向けられていったようである。

## 2. 民俗資料にみるしゃこがいの呪力

南島における魔除けの数はとても多い。これらはほとんど生活空間を対象にし、村の共同の魔除けから、村内の通路を対象にしたもの、一軒の家を対象にしたもの、一次的な行為を対象にしたもの等の別があって、日常生活が目に見えぬ災いから幾重にも防御されていたことがよくわかる。しゃこがいに関連するものに限ってみると、それらは基本的には外から侵入した災いを阻止し、あるいは撥ね返す力をもつ魔除けである。一般の魔除けでも十字形のもの・十字結び・サン等は前者の呪力、獅子を置いたり石敢当やヒンプンを立てる風習は後者に対応する。前者を“阻止の呪力”、後者を“返しの呪力”とよぶことにしよう。ちなみに、述べてきたしゃこがいの呪力を同様に表現すると“捕獲・封入の呪力”になる。

### (1) “阻止の呪力” としゃこがい

多和田真淳氏は「古琉球の祭具」のなかで、ものがアジマーになること、すなわち十字形に交差していることの意味を説いておられる<sup>38</sup>。葉の対生するリュウキュウアオキの種はアザカ（アダカ・アジャカ・ウジャカ）と呼ばれ厄除けに使われた。ススキの葉を十字に結んだものもアザカであった。特定の樹木の木片を十字にゆわえた祭具をダシチャクギと称し、これもアザカの呪具の一種とされる。「物をタブーしたり魔除けや祭具になるものの全部の総称がアザカ」であった<sup>39</sup>。

しゃこがいが、アジマーの貝、アザカの貝という意味でアジケーとよばれていることは、貝に同様の呪力が認められていたことを意味する。上江洲均氏によれば、しゃこがいの口が一對噛み合った状態がアジュン（交差すること）に当たり、このことでしゃこがいはアジケーと呼ばれるようになったという<sup>40</sup>。なるほどしゃこがいの口の強い屈曲は、縋りや交差をたやすく連想させる。このような連想は、基本に“アジマーになること”に阻止の呪力を積極的に認める思想があってはじめて成立する。この場合のしゃこがいは、アザカとよばれたリュウキュウアオキや十字に結ばれたススキと同様、アジマーに見立てられることによって成立した一つの呪具といえる。

『真珠湊碑』や『おもしろさうし』には、アザカガネやダシチャクギを用いた聞得大君の祭祀が記され、『琉球国由来記』（巻15）にもアザカの名称が記されていて、アザカの思想がすでに古琉球期に一般的であったことがわかる<sup>41</sup>。ところがしゃこがいをアザカの呪具として用いた記録は容易にみつからない。アジケーの使用が庶民レベルのものであったためであろうか。あるいはアジケーが当時まだ成立していなかったためであろうか。

多和田氏はさらに、アザカを地下に埋めて災いを避ける風習のあったことを紹介している。アザカとはアザケ、しゃこがいのことである。「魔物や幽霊の立つ屋敷の門口の通路に穴を掘って、しゃこがいの合わせ口を天に向けて埋めるのである。埋める前にしゃこがいの腹の中にダシチャクギという木片<中略>をあらかじめ入れておくのが普通である。」という。挿絵には大きな対のしゃこがいの中にマッチの軸棒を太くしたような木片の放り込まれた状況が示されている<sup>42</sup>。この場合十字で阻止することと、しゃこがいの口の方向を整えたり埋めたりする行為は別のことのように思われる。死霊の捕獲・封入というしゃこがい本来の呪力をここに認めては如何だろ

う。阻止の対象が幽霊であることに注目すると、この場合のしゃこがいは、死霊対策の呪具ではなかったかと思われるのである。このようにみると、しゃこがいで死霊を捕獲・封入しアザカで侵入を阻止し、魔除けは完成する。

上記の例はしゃこがいが墓地から生活区間へ出て来る過程を連想させる。その契機は事例にみられるような幽霊の登場、すなわち死霊の集落内への出現である。浮遊する死霊を追って、しゃこがいても集落内に出て来ざるを得なくなったのではないか。こうして死霊退治に現れたしゃこがいに、往時流行の“アザカ思想”が重なったとは考えられないだろうか。当時の集落は多くのヤナムン（魔物）に満ちていて、人々はこの対応に追われ、しゃこがいを土中に埋めるという変わった方法をも考え出したのではないだろうか。しゃこがいが“アジケー”になった後、その呪力は幽霊に限らず、次第に目にみえぬ邪気すべてに適應されるようになったのではないかと推測してみたい。

「としや 名護 からど 寄よんてやり聞きゆる 首里と 名護 あぞ目 植えらな」（思納節）。寄る年波は名護からやって来ると聞いているので、これを防ぐために首里と名護境にアザカを植えたいものだ、の意<sup>43</sup>。アザカを“植える”と表現している。寄り来る“年”を阻止しようという、これは辟邪の洒落た応用か。

宜野湾市普天間宮の新垣義夫宮司にうかがった例。具志川市田場にあった氏の生家のヒンプン（母屋の前にある魔除けの壁―後述―）の前にはしゃこがいが埋められていた。ヒンプンの（家からみて）外側の地面に、対のしゃこがいが、やや開いた口の上の部分だけを少し地上に出して壁と並行に埋められていたという。新垣宮司が子供の頃これに躓いた記憶があるのとの由。しゃこがいを土中に埋めて、家内に侵入するヤナムン（邪悪なもの）に備えた辟邪の仕掛けであろう。対の口が少し地表に出ている、このような状態が先のアザカを“植える”に当たるのだろうか。

古琉球の“アザカ思想”はいつの頃かしゃこがいにも読みかえられて、これにアジケーという特別な名称を与えた。集落のアジケーは他方で死霊を追って集落に出てきた墓のしゃこがいと融合し、アジケーの“阻止の呪力”に加えしゃこがい本来の“捕獲・封入の呪”をも備えた強力な呪具となる。こうして考えだされたのが、ヤナムン捕獲・封入のために土中に埋める使用法であったのではないだろうか。

## （2） 返しの呪力”としゃこがい

獅子・石敢当・ヒンプンはその起源を中国にもつ魔除けである。沖縄の石敢当・ヒンプンの習俗は、窪徳忠氏により<sup>44</sup>とくに福建省の影響をうけたものであると指摘されている。これら外来の魔除けは古琉球期に沖縄に根つき、民間習俗として現在もなお生き続けている。古い民家の屋根上には獅子がのり、母屋の前にはヒンプンが立つ。獅子はシーサーとも呼ばれ、ときには両側の門柱の上にも載って、目をむき口を開いて外来者を威嚇している。最近では門柱にシーサーを置くのが流行のようで、あちこちに獅子の焼き物のみかける。一方T字路のつき当たりや三叉路には、石敢当と書かれた平たい立石がある。これもこの頃とくに流行している呪具で、那覇市の大通りにも立派な石敢当が立っている。

沖縄本島の太平洋に面した一部の地域（具志川市，勝連町，与那城村，知念町久高島）には、シーサー・ヒンプン・石敢当と同様の意味でしゃこがいを魔除けに用いる習俗がある。名称はアジケー。これは“アジマーの呪具”としてのアジケーが外来の呪具と習合したと解され、現存するしゃこがいの呪具的用法では唯一のものである。しゃこがいが外来の呪具と習合した経緯を検討するために、これらについて若干の説明を加えたい。

ヒンプンとは門と母屋，または台所との間に建てられている目かくしの壁で，福建省の“屏風”が伝来したものとされる。「福建省地方ではく中略>悪鬼などが家の内部に侵入してくるのを防ぐ手段」<sup>45</sup>としての魔除けであった。沖縄においてもヒンプンは魔除けである。那覇市内ではこれをヤナムンケーシ（返し），キリチ（道の突き当たり）ゲーシとみなしていた<sup>46</sup>。

石敢当は中国では「辟邪，驅邪」を目的とし，「以前は門前にたてるのが原則だった」らしく「それがいつしかT字路の突き当たりに造立するようになった」<sup>47</sup>という。那覇市ではこれもキリチゲーシという。キリチに石を立てると「悪風を払いのけることができると信じられている」<sup>48</sup>からである。『那覇市の民俗』によると，石敢当の記録は『琉球国史略』卷四下と『使琉球記』嘉慶5年6月8日の条にみられ<sup>49</sup>，首里・那覇の石敢当習俗は文献資料では18世紀半ばまで遡ることができる。窪氏は，『琉球王朝実録』卷27の世祖8年の条に首里・那覇に百余家の朝鮮・中国人がいたと記されていることから，石敢当の習俗は「おそくとも15世紀の半ばごろまでには受容されたように憶測される」としておられる<sup>50</sup>。

獅子には王城を守る獅子，集落を守る獅子，個人の家を守る獅子などいくつかの種類がある。17世紀末頃王家の別荘（御茶屋御殿内の茶亭）に石彫獅子が置かれた記録があり，火伏せのための獅子であったとされる<sup>51</sup>。集落を守る獅子には火伏せの獅子と邪気を避ける獅子がみられる。これらムラに災いが及ばないようにするための火事の返し（ケーシ，フィーケーシ）や邪悪なものの返し（ヤナムンケーシ）の呪具であった。ムラのフィーケーシの獅子では，1689年東風平間切富盛村シリグスクに建てられたという記録が最も古い<sup>52</sup>。個人の家を守る獅子は屋根や門柱の上に載る小さな獅子である。このシーサーにもフィーケーシの伝承があるという。獅子を魔除けとする習俗がおそくとも17世紀末には始まっていたことがわかる。（図6-1）

ちなみに，中国には一般に屋根の上に獅子をのせる習俗はないという。海江田正孝氏は福建省アモイで石敢当の上に獅子の組み合わせられたものが多いことから，石敢当に獅子が付属する姿から獅子が独立していく過程を推測しておられる<sup>53</sup>。一方，福建省には風獅爺とよぶ獅子にまたがった焼き物を屋根上において魔除けとする風習がある。窪氏はこのことに注目して，シーサーの習俗がこれに関連するものではないかと述べられた<sup>54</sup>。

述べてきたように，沖縄の習俗ではヒンプン・石敢当・シーサーが全て“ケーシ・返し”の呪具として機能している。外来の辟邪は“返しの呪具”として沖縄に定着したといえる。多和田真淳氏は「フィンブン・イシガントー・シーサー」と題した文章の中で，「この三つは仲よく仕事を分担して越境しないところに共通の美点があるが，今一つ大きな共通点をもっている。それはすべての悪風，災禍，魔ものを身をもってはねかえすという特性である。」<sup>55</sup>と端的にその特徴





図6 沖縄の獅子

1. 東風平町宮盛勢理城の石彫大獅子（1689年造立）。
2. 屋根獅子（壺屋焼）。口がしゃこがいに読みかえられる。  
（1, 2とも写真からのスケッチ）

を述べておられる。

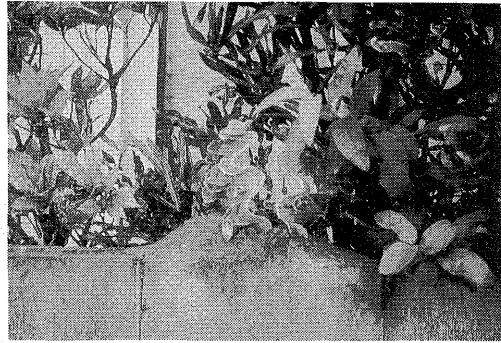
ところがこの美点の揺らぐ例がある。「辟邪の目的で路上や、三叉路，その他石敢当を造立して然るべき場所に，シーサーと称する石獅を造立することがある」<sup>56</sup>からである。そしてこのシーサーに似た使われ方が，アジケーにある。アジケーはシーサーが置かれるべき門柱の上や，石敢当のあるべき石堀の上，また石敢当の填め込まれた石垣の上に番<sup>つがい</sup>で置かれる。番の口は半ば開いて，丁路地に突き当たる路地の方向，門の向い合った方向または外側を向いている。これは獅子が使用される場合と同様の向きである。（写真5）

獅子が火伏せの呪力をもつのは，開いた口で火を食べるからだといわれる<sup>57</sup>。アジケーの現在の民俗的解釈も「侵入する魔物をその口で食べてしまうからだ」と聞いた<sup>58</sup>。両者はその口が魔物を食べる点で共通している。このことは，現在一部の地域でサメの顎骨を開いて門柱に置いていることでも了解される。魔物を食べる呪力をもつシーサーの口が，しゃこがいに読みかえられて，これを“返しの呪具”にしたのである。しゃこがいの呪力の淵源がその口の動きにあったことを考えると，シーサーからしゃこがいへの置換が，南島人の頭の中で矛盾なく行われていったのも容易に解し得る。

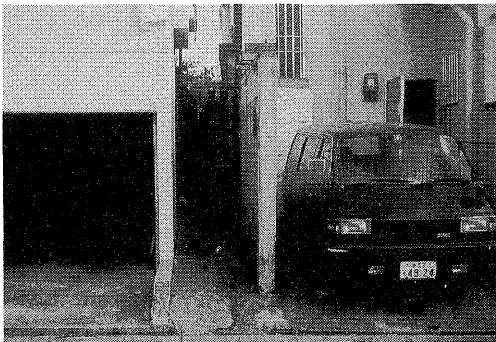
では何故外来の呪具は，しゃこがいによって読みかえられなければならなかったのだろうか。集落内に“返しの呪具”を必要とするどのような状況があったのだろうか。前述のように，“返しの呪具”は15世紀から18世紀頃にかけて沖縄の社会に受容されていったと考えられる。しかし獅子や石敢当は基本的にムラ共同で設置するものであり，設置が一般庶民の自由になるのはごく最近のことであった。これらを個人の屋敷に設置するようになるまでの間の方策として考え出されたのが，しゃこがいへの呪力の読みかえではなかったか。この時期しゃこがいはすでに魔除けのアジケーとして定着していた可能性が高い。しゃこがいの口の形状を獅子の口に見立て，アジケーの呪術性をそのままスライドさせ，人々は改めてこれを“返しの呪具”として成立させたのではないだろうか。（図6-2）



1



2



3

### 写真5 石敢当のしゃこがい

1. ブロック塀の左端上に一対のヒレジャコがのる。この下の塀の中に石敢当が埋めこまれている。
2. しゃこがいの拡大
3. 1の位置に立ってみた道路側の光景。細い路地が突き当たる。

宜野湾市在住の津堅島出身者宅。  
1991年撮影。

この習俗は現在具志川市や勝連町周辺以外の地域にはみられない。沖縄の一般的な魔除けとは言いがたいことからみると、“返しの呪具”としてのアジケーの成立は、近世琉球期でもかなり新しい時期に求められるのではないだろうか。

古琉球期頃伝来した中国の辟邪思想は、結果的には“返しの呪術”として在地化し、支配階級から被支配階級に浸透していったとみられる。“返しの呪具”は浸透の過程で、ムラ、辻、個人住宅のいくつかのレベルに分かれていき、それぞれの経済的状态に合わせて使用法が工夫されていった。この間庶民レベルで新たな呪力の読みかえがなされ、ある地域ではアジケーが獅子に転用されていく。近年やや曖昧になり始めた獅子や石敢当の役割分担の境界線は、まずシーサーによって跳び越えられ、アジケーによってさらに埋められていっているようである。“返しの呪具”としてのしゃこがいは、一つの辟邪思想の在地化と拡大解釈の果てに出現した、末期的呪具といえないだろうか。

### (3) 幼児の死としゃこがい

人の誕生や幼児の死にしゃこがいの関わる例がある。赤子の死んだ時はしゃこがいにいれて便所の申の方向に埋める(宮古島)、死産児を家の後ろに埋めてその上にアザイ(しゃこがい)をかぶせておく(竹富島)、かって嬰兒を埋殺する時クバの葉に包み上からしゃこがいでおさえた(八重山)等<sup>59</sup>である。

一般に死産児や幼児の死は異常死とみなされ、その葬法も特殊である。死亡年齢によって童墓などに入れる場合と墓以外の場所に埋める場合があり、後者ではさらに生活域から離れた場所と屋敷内の別がある。前者は墓地に葬られているので死後の供養をうけることができるが、後者の場合それが無い。酒井卯作氏の研究によると、後者では「死産児には邪神がついていると信じられて」いたり「アクマ」と呼ばれて、その扱いは「厳しいというより、むしろ呪術的なものを前提としたような感情がみうけられるようだ」とされる<sup>60</sup>。このような民俗例は宮古・八重山地域に顕著である。そしてしゃこがいを用いた民俗例も現在これらの地域に集中し、さらに供養をうけられぬ屋敷内葬のものに限って認められる。これらの場合しゃこがいが、幼児死霊のもつ呪力に対して使用されたとは考えられないだろうか。

先述した考古資料の事例12の宜野座村シドゥフチ森南側のガマ4号墓では、墓の入口左側に4個の石で囲まれたようなうづぶせのしゃこがいがあったという。14の宜野湾市喜友名山川西方丘陵の古墓群30号墓では、墓前庭の左側に小穴を作りしゃこがいの中に幼児を葬っていた。両者ともグスク時代から近世琉球期にあたる。シドゥフチ森南側のガマ4号はしゃこがいの位置等からみても幼児を葬った跡ではないかと思われる。細かくみると民俗資料と考古資料には異なるところがあるが、しゃこがいを幼児に使用する点では共通している。

祖先祭祀が位牌を中心に次第に形を整える近世琉球において、これに組み入れられない異常死に対しては様々の処置が考え出されている。民俗例にのこる幼児や死産児の葬法もその一つである。この過程で、“子孫に祀られない死”に対する意識が鮮明になり、子孫を遺さず去った霊の封入のために、しゃこがいの適用が始まったと考えられないだろうか。このようにみれば、洞穴墓の中で、この時期、しゃこがいがとくに幼児に向かっていく現象は理解しやすい。また宮古・八重山地域の民俗例を近世においてこれに繋ぐこともできる。

一方民俗学・民族学では、酒井氏や大胡欣一氏の論考に示されるように<sup>61</sup>、幼児や死産児の葬法を「再生信仰」や「先祖帰り」で説明する考えが強い。これに従えばしゃこがいの使用は再生を意図したものとなり、上江洲氏の「シャコ貝は女陰を意味し、同時に邪気を払う威力を有する思想があった」という指摘<sup>62</sup>につながる。幼児の死としゃこがいの結びつきを説明するのに、これら二つの考え—“祀られない死に対する死霊封じ”と“再生信仰”—のどちらがより妥当なのか、にわかに判断しかねる。ただしゃこがいの用法全体をながめると、考古資料とも連結する前者の解釈が筆者には理解しやすい。ここでは一応前者の解釈に従い、これを“捕獲・封入の呪具”の延長として理解し、博雅の示教を仰ぎたいと思う。

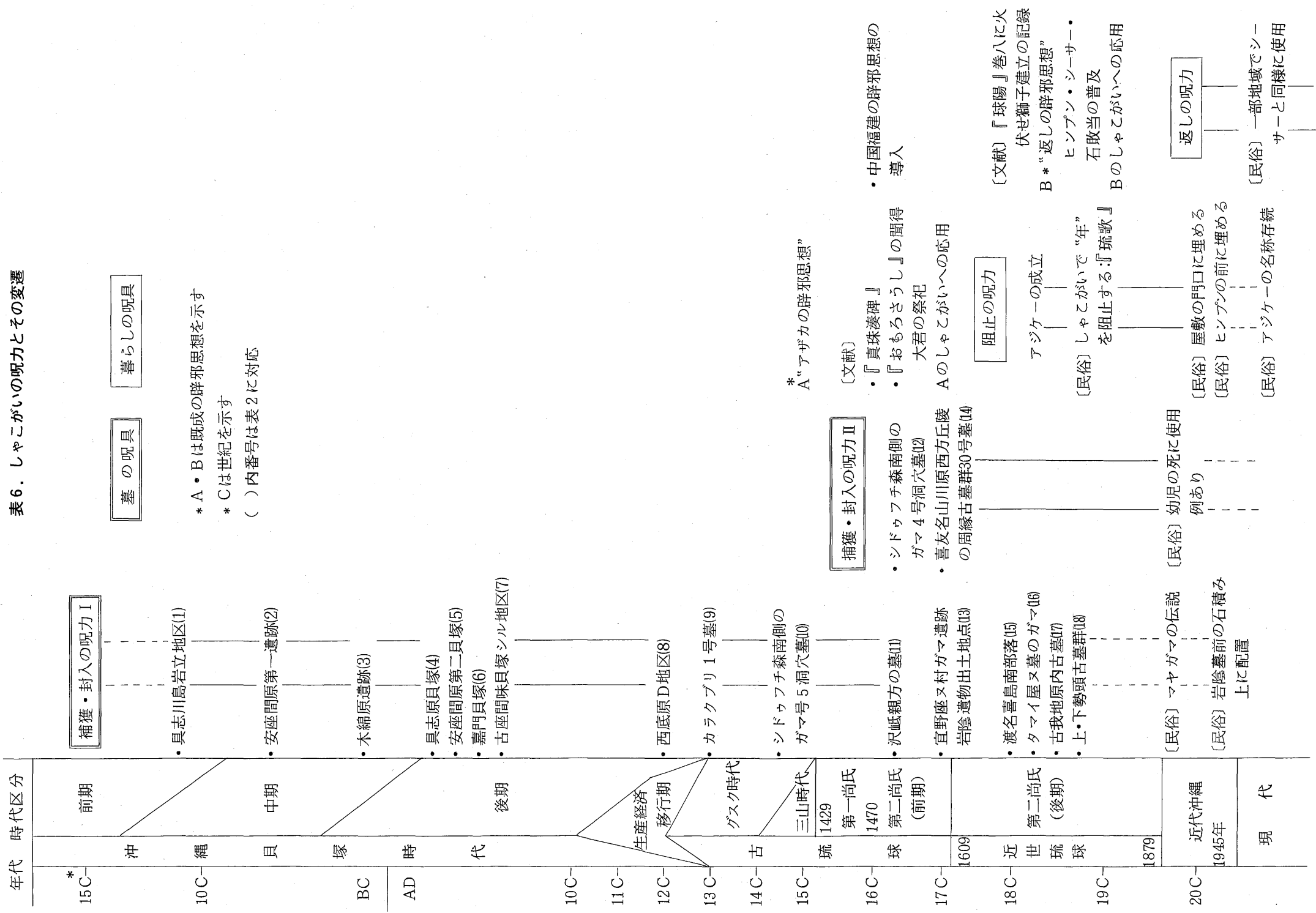
#### 四、結語

述べてきたように、呪具としてのしゃこがいには“捕獲・封入の呪力”、“阻止の呪力”、“返しの呪力”がある。これらを、使用される場所によって“墓の呪具”と“暮らしの呪具”に分け、表5・6にまとめてみた。

表5. 呪具としてのしゃこがいの分類とその呪力

	墓の呪具		暮らしの呪具	
呪具の成立	沖縄諸島独自の辟邪思想による		既成の辟邪思想のしゃこがいへの応用	
呪具の分類名とその効能	捕獲・封入の呪具 死霊を異界に封じ込める		阻止の呪具 邪気を阻止する	返しの呪具 邪気を撥ね返す
呪具の細分と成立の説明	I類 下欄理由①～③ に対応	II類 下欄理由①～④ に対応	“アザカの辟邪思想” のしゃこがいへの応用。	“返しの辟邪思想” のしゃこがいへの応用。
使用方法	墓の人骨近くに置く。	幼児墓に置く。 集落の幽霊の出る場所に埋める。	家の門口に埋める。	家の門・T字路・三叉路に置く。
使用開始時期	沖縄貝塚時代の 前～中期（遡る 可能性あり）	古琉球期か	古～近世琉球期	近世琉球期
しゃこがいが呪具に選択された理由	①珊瑚礁海底に異界を想定する意識の存在。（推測） ②しゃこがいの生態的特徴 ・海底に上向き開口する ・敏感な危険察知能力 ・厳重な閉鎖性 ・海中の神秘的な容姿 ③貝殻の造形的魅力 ④近世祖先祭祀の制度化に伴い、制度に組み込まれない幼児の霊をとくに恐れる意識の出現。		①十字形を阻止のシンボルとする既成の“アザカの辟邪思想”の存在。 ②しゃこがいの口の噛み合った状態をアザカとみなし、しゃこがいをアザカの呪具とみる。 アジケーの成立。	①中国福建地方の文化伝来を契機とする“返しの辟邪思想”の存在 ②しゃこがいの口の状態を獅子の口に見立て、しゃこがいを返しの呪具とみる。

表6. しゃこがいの呪力とその変遷



\* A・Bは既成の辟邪思想を示す  
\* Cは世紀を示す  
( )内番号は表2に対応

補獲・封入の呪力 II

- ・シドゥーフチ森南側の  
ガマ4号洞穴墓(12)
- ・喜友名山川原西方丘陵  
の周縁古墓群30号墓(14)

阻止の呪力

- 〔民俗〕 しゃこがいで“年”  
を阻止する: 『琉歌』

返しの呪力

- 〔民俗〕 一部地域でシー  
サーと同様に使用

しゃこがいの呪力で最も古いのは“捕獲・封入の呪力”である。これはしゃこがいの生態的特徴をもとに南島人が産みだした独自の呪具である。使用は墓に限定されており、原義を保った使用は近世まで認められ、それ以降は派生的使用や伝説として伝えられているにすぎない<sup>63</sup>。古琉球期頃みられる幼児を対象としたしゃこがいの使用は、本来の用法から派生したものである。本来の呪力を“捕獲・封入の呪力Ⅰ”とし、派生した呪力を“同Ⅱ”とよんで区別しておこう。沖縄におけるしゃこがいの呪力は、このようにみると“死霊の捕獲・封入”という基本を変えることなく、三千年間存続したとすることができる。

“阻止の呪力”と“返しの呪力”は古琉球期以降、他の辟邪思想によってしゃこがいに付加された呪力である。他思想の読みかえがしゃこがいに集中したのは、この貝が沖縄の伝統的呪具であり、かつ人の想像力を引き出しやすい形状だからであろう。“阻止の呪力”はアザカの辟邪思想の下で成立し、しゃこがいはアジケーという固有名称を獲得した。“返しの呪力”は中国福建の民間辟邪思想が在地化していくなか、一部の庶民レベルで成立した。沖縄本島東部一地域に現在アジケーの名称と“返し”の習俗だけが伝わっている。“阻止”と“返し”の二つの新しい呪力によって、しゃこがいの呪力は墓から生活空間にひきずり出されることになり、辟邪の対象を死霊から魔物一般に拡大し、しゃこがいは暮らしの呪具となったのである。

このようなしゃこがいの使用は沖縄諸島には盛んであるが、南島の他の地域ではそれほど一般的ではない。宮古・八重山諸島には民俗例と考古事例が1例、奄美諸島では考古事例1例が知られるに過ぎない。考古学的な文化の異同とともに、今後注意していきたい問題である。

しゃこがいについて日頃考えていることをまとめてみた。慣れない民俗資料に手を出しているので、論に不十分なところや偏りが多々あると思う。諸学のご批判とご教示を仰ぎたい。

小稿をまとめるにあたり、下記の諸先生に教えをうけた。末筆ながら記して深く感謝申し上げます。

新垣義夫、池田栄史、大城秀子、岡野信子、上村俊雄、呉屋義勝、島袋春美、高宮廣衛、玉木順彦、津波高志、当真嗣一、名嘉真宜勝、中村 愿、花城潤子、松下孝幸。

國分直一先生に因んだ本号に拙分を掲載することが叶い、大変光栄に思います。先生の豊かな学問と超人的な御健康を称え、ますますの御発展をお祈りいたします。

## 註

- 1 以下小稿で、貝を科名で示すときにはひらがなを用い、種名で示すときにはカタカナを用いるとする。
- 2 (a) 1 齊藤忠：「原始」『日本全史』239ページ、1958  
(b) 上江洲均：『沖縄の民具』慶友社、1973

- (c) 三島格：「シャコガイについて—沖縄通信 津堅島より」『えとのす』第5号，1976
- (d) 三島：「サンゴと貝—南島葬制覚書—」『南島考古』5号南島考古学会，1977
- (e) 三島・寺師見国：「鍋及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」『人類学研究』7—1・2，1960
- (f) 相山林継：「貝殻を敷いた墓室」『袖ヶ浦町郷土博物館館』2，1983
- (g) 小澤重雄：「貝床を持つ古墳・横穴について」『古代』93号，1992
- 3 当真・上地正勝・上原静ほか：『沖縄県統谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書』沖縄教育委員会・読谷村教育委員会，1978
- 4 註1 (b) 文献324ページ。
- 5 貝についての記述は下記文献によった。
- (a) 吉良哲明：『原色日本貝類図鑑』保育社，1977
- (b) 白井祥平：『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星図書，1977
- (c) 渡辺ひろし：『貝Ⅱ』学習研究社，1979
- (d) 奥谷喬司：『海の貝50種』ニューサイエンス社，1990
- 6 道具をもたずに、岩からこの筋肉を切り離すのは容易ではない。小さな貝ひとつに腹立たしい思いをした経験をもつのは筆者だけではないと思う。
- 7 この藻類のことをゾーザンテラという。二枚貝で他にゾーザンテラをもっているのはリュウキュウアオイガイ類のみだとされる。註5 d 文献93ページ。
- 8 時代区分は主として下記の文献によった。
- (a) 沖縄考古学会編『石器時代の沖縄』，1978
- (b) 高宮廣衛：「暫定編年（沖縄諸島）の第三次修正」『沖縄国際大学文学部紀要』第12巻第一号，1984
- (c) 高良倉吉：『琉球王国史の課題』ひるぎ社，1989
- (d) 安里進：『考古学からみた琉球史—古琉球世界の形成』上，1990
- (e) 高良・田名真之ほか：『新琉球史』琉球新報社，1991
- (f) 名護市教育委員会ほか：『名護市史セミナー琉球フォーラム 考古学の時代区分』資料，1991
- (g) 高宮：「南島考古雑録」『南島考古』11号，沖縄考古学会，1991
- 9 (a) 安里嗣淳・中村愿ほか：『具志川島遺跡郡第一次発掘調査報告書』伊是名村教育委員会，1977
- (b) 安里・中村ほか：『具志川島遺跡郡第二次発掘調査報告書』伊是名村教育委員会，1978
- (c) 安里・中村ほか：『具志川島遺跡郡第三次発掘調査報告書』伊是名村教育委員会，1979
- (d) 安里・中村ほか：『具志川島遺跡郡第四次発掘調査報告書』伊是名村教育委員会，1981
- (e) 高宮廣衛・上村俊雄・安里・中村ほか：『具志川島遺跡郡発掘調査概報』伊是名村教育委員会，1991
- 10 (a) 呉屋義勝：『じゃなⅠ図版編』宜野湾市教育委員会，1990
- (b) 呉屋：『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市教育委員会，1989
- 11 表2の公表ならびに詳細の記述については宜野湾市教育委員会呉屋義勝氏のご配慮による。

- 12 註3文献に同じ。
- 13 安里・岸本・盛本勲：『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県教育委員会，1985
- 14 註10 (b) 文献に同じ。
- 15 『城間古墓群・城間遺跡・嘉門貝塚』浦添市教育委員会，1989
- 16 (a) 知名定順・花城潤子・盛本・阿利直治：「座間味村古座間味貝塚出土の人骨について」『花綵』創刊号，沖縄国際大学考古学研究会 O. B. 会，1979  
 (b) 岸本義彦・島袋弘・下地安広ほか：『古座間味貝塚』沖縄県教育委員会，1982
- 17 (a) 当真ほか：『発掘ニュース(1) 渡名喜島遺跡郡』渡名喜村教育委員会，1977  
 (b) 当真：「先史時代」『渡名喜村史』上巻，1983
- 18 知名定順：『宜野座村の文化財(2)』宜野座村教育委員会，1982
- 19 註18文献に同じ。
- 20 (a) 大嶺薫：「四百年前の歴史の秘められた上里墓調査報告一沢岬親方(護佐丸の孫)之墓」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会，1961  
 (b) 島尻勝太郎ほか：『那覇市の文化財』那覇市教育委員会，1991
- 21 註18文献に同じ。
- 22 註18文献に同じ。
- 23 呉屋：『喜友名遺跡跡』宜野湾市教育委員会，1984
- 24 註17文献に同じ。
- 25 註18文献に同じ。
- 26 座間味政光・太田宏好ほか：『石川市古我地原内古墓』沖縄県教育委員会，1987
- 27 (a) 中村愿ほか：『上・下勢頭古墓郡』北谷町教育委員会，1986  
 (b) 中村：「墓の形態と厨古甕のタイプについて」『シンポジウム南島の墓一沖縄の葬制・墓制』沖縄県地域史協議会編，沖縄出版，1989
- 28 (a) 金武・当真・岸本：『竹富町・与那国町の遺跡一詳細分布調査報告書』沖縄県教育委員会，1980  
 (b) 嵩元政秀・当真：「考古学上よりみたる南島の葬制について」『南島研究』第22号，1981
- 29 三宅宗悦：「南島の旅」『ドルメン』第3巻10号，773—4頁，岡書院，1934
- 30 表4は次の文献によるところが大きい。岸本・島：「沖縄における貝の集積遺構一ゴホウラ・イモガイを中心に」『紀要』第2号，沖縄県教育委員会，1985
- 31 金武正紀・宮城利旭ほか：『宇堅貝塚郡・アカジャンガー貝塚発掘調査報告』具志川市教育委員会，1980
- 32 註13文献に同じ。
- 33 註16 (b) 文献に同じ。
- 34 安里嗣淳・名嘉真武夫：『伊江島ナガラ原西貝塚』伊江村教育委員会，1979
- 35 (a) 白木原和美・中山清美・里山勇廣ほか：『手広遺跡』竜郷町教育委員会・奄美考古学会，1984  
 (b) 白木原・馬原和広ほか：『手広遺跡概報』熊本大学文学部考古学研究室，1986



- 36 当真・上原ほか：『久米島大原貝塚発掘調査報告』沖縄県教育委員会，1980
- 37 玉木順彦氏によると，現・近代の墓で，石室内の四隅に魔除けにウシヤブタの骨を置くことはあるが，しゃこがいを置く例を聞いたことはない，との由。葬具としてのしゃこがいの使用は，近代から現代にかけて衰退してしまったか。
- 38 多和田真淳：「古琉球の祭具—アザカガネとダシチャクギー」『沖縄タイムス』1963年11月3日から14日まで連載，『古稀記念多和田真淳選集』1980に再録。
- 39 これについて金久正氏は，アザハル（糾はる）は「通路などにじゃまになるように物がはだかったり，横たわったり」する状態を示し，アザフ（糾ふ）は「同類のものを組み合わせたりより合わす」あるいは「異種のを交差させる感じが強く」，これが通行や行動のじゃまになる観念を伴っている」と説明しておられる。金久正：『増補・奄美に生きる日本古代文化』至言社，1978
- 40 註2（b）文献324ページ。
- 41 (a) 『真珠湊碑』嘉靖元年（1522）「だしきやくぎ，つさしよわちへ，あさかがね，とどめわちへ」  
 (b) 外間守善・西郷信綱『おもしろさうし』日本思想大系18，岩波書店，1972  
 ・第一 嘉靖10年（1531）あおりやへが節16の「だしきや打ち釘」  
 ・第九 天啓3年（1623）さしぶおれなおちへが節508の「あさか嶽やびちへ」  
 ・第十三 天啓3年（1623）しよりゑとの節763の「だしきや釘」  
 (c) 『琉球国由来記』（巻十五）「アザカ森」
- 42 註38文献に同じ。
- 43 東恩納寛惇：『注釈南島風土記』沖縄郷土文化研究会南島文化資料室，1950
- 44 (a) 窪徳忠：『増訂沖縄の習俗と信仰』，1974  
 (b) 窪：『中国文化と南島』第一書房，1981  
 (c) 窪：『中国文化からみた沖縄の民間信仰』ひるぎ社，1989
- 45 註44（b）文献53ページ。
- 46 那覇市市史編纂室：「那覇市の民俗—魔よけ」『那覇市史』資料編2巻中の7，1979
- 47 註44（b）文献73ページ。
- 48 註2（b）文献322ページ。
- 49 註46文献452ページ。
- 50 註44（b）文献83ページ。
- 51 『使琉球雑録』の「石をうがちて虎伏をつくる」。註46文献では『南島風土記』を参考に，獅子の造立を1677—83年の間としている。
- 52 『琉陽』巻八，尚貞王21年（1689）の条。風水師の蔡応瑞が八重瀬岳を火山に見立てて火伏せのために造らせた。
- 53 海江田正孝：「厦門に於ける石と驅邪」『民俗台湾』3—2，1943
- 54 註44（c）文献33—35ページ。
- 55 多和田：「フィンポン・イシガントー・シーサー」『サンデーおきなわ』1977年8月7日。註38文献再録。

- 56 註44文献34ページ。
- 57 註46文献454ページ。
- 58 宜野湾市での聞きとりによる。
- 59 (a) 註2 (b) 文献324ページ。  
 (b) 大胡欽一：「祖靈観と親族慣行—琉球祖先崇拜の理解をめざして—」『沖縄の民族学的研究—民俗社会と世界像—』日本民族学会，民族学振興会，1972,379ページ。
- 60 酒井卯作：『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房，1987，第二章2「幼児葬」379—80ページ。
- 61 (a) 註59文献。  
 (b) 註60文献173ページ。
- 62 註2 (b) 文献324ページ。
- 63 宜野湾市大山に伝わるマヤガマの伝説を引いておきたい。ある村で夜泣きする子供の家の周りをマヤ（猫）がひとまわりすると、その子供は魂を抜かれて（方言ではシートラリンという）、死亡してしまった。このようなことが続いたので、ある人がこのマヤの跡をつけていくと、マヤはガマ（洞穴）の中にある甕にはいっていったこの甕の口にしゃこがいで蓋をして縛ったところ、それ以後マヤの徘徊はなくなり、被害はなくなった。この話は普天間神宮の新垣宮司からうかがった。しゃこがいが死霊封じの呪具であることを伝える伝説である。

#### 新刊紹介

### 酒井忠夫編 『台湾の宗教と中国文化』

従来、中国の道教研究は華北を中心としたものと、台湾を含む華南のそれと別個に行われてきた。その中で中国全体の宗教・道教史の流れを踏まえての調査研究が国立成功大学歴史学系を中心に行われてきた。本書はそのプロジェクトの日本側メンバーによる研究報告である。

内容は酒井忠夫「中国・台湾史よりみた台湾の道教」、丸山宏「台湾の道教と『道蔵秘要』」、石井昌子「澎湖地区における鸞堂と寺廟」、釈聖巖「現代台湾仏教的学術研究」、石田憲司「明代道教史上の全真と正一」、金井徳幸「南宋における社稷壇と社廟について—鬼の信仰を中心として」、阿部肇一「『宋高僧伝』に著れ

た新羅僧伝について」、石田徳行「晋・南朝における仏教の地域性について」、今枝二郎「玄宗皇帝の道教理解について」、山田利明「靈宝齋における齋戒の意義」、光眞督「吐蕃王チンデツェンの対宗教策」の11論文である。

先の大淵忍爾編『中国人の宗教儀礼』（1983）の大著の補完の視点からも読める内容である。なお、窪徳忠著『モンゴル朝の道教と仏教』（平河出版社1992.7）も同時期に刊行された。  
 （佐野賢治）

B5判 317頁 風響社刊  
 1992年6月刊 4635円